Metal Gear Hayate

銀ギツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｅｔａｌ　Ｇｅａｒ　Ｈａｙａｔｅ

【Ｎコード】
Ｎ８７３０Ｄ

【作者名】
銀ギツネ

【あらすじ】
１６歳にして三千院家の執事を務める綾崎ハヤテは、ナギお嬢様と共に白皇学院に通っている。しかしある日、彼の不幸がＭＡＸに達したのか。その白皇学院があろうことかテロリストに占拠されてしまった。ナギお嬢様は、そして彼の友人たちの運命は……？すべての運命は借金執事、綾崎ハヤテにかかっている……

プロローグ『事件は無常にも唐突に起こるもの、それがハヤごとクオリティー』

初めまして。銀ギツネと申します。以降お見知りおきを。

今回初めて書かせていただく小説は、「ハヤテのごとく！」の世界観にＭＥＴＡＬ　ＧＥＡＲ　ＳＯＬＩＤの設定を加えたものです。

また、ストーリーの進展上ハヤ×ヒナで行かせていただきます。

クロス作品（？）、ハヤ×ヒナが苦手だという方は読まないことをお勧めします。

では、ごらんあれ……。

プロローグ『事件は無常にも唐突に起こるもの、それがハヤごとクオリティー』

その日は、朝から『いつも』と違う一日だと思っていた。そしてその『予感』が『確信』に変わったのが今。

僕にそう思わせた原因は、都内某所、まさに一国に聳え立つ時計塔と見まごうほどに広大な『白皇学院』に通う僕の主、三千院ナギ――これ以降は、僕の主であるため『お嬢様』とお呼よびします――にある。

お嬢様は、世界でも有数の資産家、三千院家当主、帝おじいさんの唯一の孫娘のために、幼い頃から色々とありまして……。我が家万歳主義の、外に出るのを極端に嫌う――俗に言うＨＩＫＩＫＯＭＯＲＩ状態。

いつもは色々な理由をつけて、遠まわしに、時に直接「学校に行きたくない」と言うお嬢様をなだめたりすかしたりして、どうにか学校に連れて行っている。たまにミッション失敗することもあるけれど。

それがどういう理由（ワケ）か、今日の朝はどういうわけか、お嬢様を学校に行かせるために部屋に行くと、自ら扉から出てきて、

「今日は学校に行くぞ。すぐに支度をして来い」

なんて言って、一人でお着替えまでして部屋から出てこられたのです。
流石の僕も驚き、お嬢様に検温するように薦めたぐらい（そのすぐ後殴られちゃいました……）。
マリアさんにこの事を伝えても、
「まあ、偉いですね♪」
「いやいやマリアさん、あのお嬢様が、一人で早起きして、しかも自発的に学校に行くって言っているんですよ！？
クララがハイジ無しで立ち上がることよりもありえない可能性ですよ！？」
「確かにそうですけど、早起きしたこと自体は立派なことなんですし、自分から学校に行きたいと思う日があっても――本当は毎日、そう思ってもらいたいところですけど――いいじゃないですか」
と、珍しくマリアさんも慌てた様子なくホホホと微笑んだので、僕はそれ以上言うことはできなかった。
そして1時間ほど前。ＨＲも終わっていざ帰りましょう、という時に、
「すまんハヤテ。今日は部活にでるから、先に屋敷に戻ってくれ」
あ、あああああああのお嬢様が！？　部活に参加！？

ま、まさかお嬢さま！？

とうとう、真人間に生まれ変わることに成功したんですね！？

あのドッペルゲンガー事件（小説第一巻参照）をきっかけに――とは言っても、あの事件からもう８ヶ月になろうとしていますが――、自分の良心を完全に受け止めようということを決心したんですね！？

そうだというのなら！　この綾崎ハヤテ、全力でそんなお嬢さまにお供します！

「では、僕もご一緒させていただいても、よろしいでしょうか？」

「構わん。大丈夫だから」

「そ、そうですか。では、校門のほうでお待ちしています」

「ならん！　いいかハヤテ、今日はおとなしく１人で屋敷に戻るのだ！

もし屋敷に戻らず、学校に少しでも留まっていたら……。ク・ビ・だからな！」

と、お嬢様は絶○を思わせるオーラを纏って僕に解雇予告をしてきたので、僕は仕方なく１人で屋敷に帰ることになったのが、先ほども述べたとおり大体１時間前。

そして帰り道にも思いました。――やはり変だ、と。

実を言うと、今日が変な日だと思わせているのはお嬢様の言動以外にもあった。

いくら僕が借金1億5千万を持つ不幸な男だからって――

カラスがこちらを睨んでギャアギャアこの世の終わりを告げるかのように鳴き叫び、

黒猫が、大移動する水牛を思わせるような群れをなして、一斉に僕の目の前を横切り、

あまつさえ、先日お嬢様に買ってもらい、常に点検をしていた黒光

りする靴の紐が結び目でちぎれてるなど、不幸を告げるオンパレード。

ありえない。ぶっちゃけありえなーい。今まで見たことのある光景が、今日でこれだけ見てしまうとは。
しかもその不幸が今目の前で起こっていないから、余計に怖い。

そんなことを考えていたら、いつのまにかお屋敷に辿り着いていた。
とりあえず、あまり嫌なことは考えずに忘れるとして、執事としての仕事を全うしよう。

僕は玄関のドアに手を掛け――

「ふぎゃぅ！」

「は、ハヤテ君！？　大丈夫ですか！？」

「ま、まあ一応……」

突如ドアが勢いをつけて開き、僕の鼻に直撃した。鼻をぶつけた原因は彼女、三千院家のメイド頭のマリアさん。

いたたたた……。地味に痛いな、これは。でも漫画やアニメだと、次のコマやシーンではすぐに痛みを忘れるかのごとく行動しているのが不思議だよな。

……いけないいけない。そうやってすぐアニメや漫画と比較するのはダメだ。

「マリアさん……そんなに急いでどうしました？」

「ハヤテくんがもうすぐ帰ってくるとＳＰに聞いて、急いで会いに行こうと！　それはそうと、大変な事になりました！」

「あ、僕でしたか。どうしたんですか？　またシラヌイが獲物（ゴキブリ）を？　それとも……」

「白皇が……、白皇学院が……テ、ロリストに占拠されました！」

「……」

僕はその言葉に絶句するしか出来なかった。

だってそうでしょう。あの名門校がテロリストの襲撃ですよ？
そらもう何処かの王室宮殿並みの広大さを誇る校舎だから、治安を守るための警戒は厳重なはず。ア〇ラックとか。あ、それは違ったか。アル〇ックか。

とりあえず、一応確認してみよう。

「えっと……マリアさん？　今日は４月１日ではないのですが……」

「嘘ではありません、第一私だって日付ぐらい覚えています！　今日は１０月９日でしょう？

たった今ナギのＳＰから連絡が入ったのですが、武装した男たちが何百人と校舎内に忍び込んだ、その僅か数分後、銃声が聞こえた

そうです！

ＳＰが急いで状況を確認しようと中に入ったそうですが、発砲してきた上、生徒を人質に取り始めたのでやむなく帰ってきたと……」

ほ、本当に？　本当に白皇学院がテロリストに占拠されたのか？

確かに、日本は島国だったからテロ対策も先進国でかなり遅れていると聞いたことがある。

でも、そのテロ行為がまさか身近な所で起こるとは全然考えてもみなかった。

「じゃあお嬢様も……」

「ナギどころか、ワタル君や伊澄さん、ヒナギクさんに咲夜さんまで」

「ちょっと待ってください。なんで咲夜さんも？」

お嬢様の幼馴染兼親友である咲夜さんは白皇の生徒ではない。他の学校の生徒のはず。その経緯についてはコミックスを参照してください。

それはそうと、何故テロに巻き込まれる必要があるんだ？

「ええ、それが
『ウチはナギの将来のパートナー、他校の生徒だからって関係あらへん！
ウチを止められるものはなんにもないのだー！』と、入校許可証を片手に白皇学院に……」

「……」

そりゃ、入校許可証を持っていれば、少なくとも先生に止められることはないだろうけど……。

咲夜さんらしいと言えばらしいけど、パロディを使ったりボケなかったあたりが咲夜さんらしくなかった。

僕らはとりあえずダイニングに入りる。

そこには人語を話すホワイトタイガー猫のタマ（人語を話すという事実を、お屋敷の中では僕しか知らない。）、三千院家執事長のクラウスさんがイスに座っている。

黒猫のシラヌイはいつのまにかマリアさんの肩にちょこんと乗っている。

僕がもしも帰らなければ。否応なしにその考えが頭によぎる。

お嬢様、ワタル君、伊澄さん、咲夜さん、ヒナギクさん、そして全校生徒の中の１人でも危険にはならなかったはず。

今白皇にいる多数の中から数人は助け出せたはず。

確信はない。だけど、そう考えてしまう。

やはりどんな理由があっても、例え主から帰れと命令されても、主を守る執事として学校の周囲に待機していれば良かった。

学校の敷地内じゃないから、一応はお嬢さまの命令に背いたわけじゃない。見つかっても、もうそろそろ帰られる時間かと思って、お迎えに上がりました、なんて嘘を言えばよかったんだ。

こんなんじゃ僕、執事失格だな……。それ以前に、お嬢様は――

お嬢様が無事なのか。それだけが心配です……。

それが、今。確信に変わったのが今。

プロローグ『事件は無常にも唐突に起こるもの、それがハヤごとクオリティー』

次回の更新はなるべく早めにしようと思います。

お互い頑張っていきましょう！　ではでは……。

9月15日、本文の細かい箇所を修正しました。

誤字など、もし見かけましたら、ご指摘よろしくお願いします。

1話「話によっては、一人称と三人称がごっちゃです」（前書き）

9月17日、細かい箇所の修正を致しました。

1話「話によっては、一人称と三人称がごっちゃです」

「僕……白皇に行ってきます！」

僕が考えた末の結論は、お嬢様たちを助けに行くこと。僕がいくら悩んでいても、事態が解決するとはとても思えない。

警察が普通に交渉を始めても、多分応じないだろう。ＳＷＡＴも、あの広大な校舎の中じゃ制圧に時間がかかるし、お嬢さまたちの体力がもたない。

それだったら、自分の手で助けに行きたい。僕だったら敷地内を、完全とは言えなくても把握している。
いくら協調性がないとか、無鉄砲だとか言われても構わない。それで事態をどうにかできるのだったら、僕はなんでもやってやる。

席を引いた。

「まあ、待て」

「クラウスさん！？」

僕の肩にクラウスさんの手が置かれた。不思議なことに、立とうとしても立てない。立つことができない。それほどにクラウスさんの力が強い……？　でも、肩に込められた力なんて感じない。

「なんの準備も整っていない。が、事前にお前を送り込むことは決定していた。

お嬢様の身を守ることが出来なかった汚名は、返上してもらうぞ？」

――か、勝手に決めていいんですか？

内心そう思いつつも、クラウスさんの言葉に安堵してイスを戻した。反対をしてくれなかったのが、嬉しかった。

クラウスさんが肩から手を外すと、代わりにマリアさんが席を立つ。

「では、これからのことについて話し合いましょう。まずは敵の勢力から」

マリアさんがそう言って指を鳴らすと、天井がカパッと開いてスクリーンがゆっくりと降りてきた。机の上に置かれた映写機が、ジジジジと作動し始める。

カシャッ

画面に映し出されたその顔は、ナギお嬢様のお爺様『帝』さんの顔からヒゲをなくした姿に似てなくもなくて、右目は眼帯を覆われていた。

どこがで、見たような気がする。なんでだろう……？

「彼が今回のテロの首謀者、『リトル・ボス』です。
１９３９年生まれ、アメリカ人。１５歳のときに日本に渡り、２０歳のときに帰国、アメリカ軍に入隊しています。ＳＥＡＬｓで５年間在籍しています。
１９６５年、傭兵としてかなりの年月の間ベトナム戦争に参加。多大な功績を残した後、各地で紛争に参加しています。
その残した数々の功績、圧倒的カリスマ能力、戦闘能力。彼はその筋では『小さき英雄』と呼ばれています。
他に、幹部的存在の敵を数名確認。白皇学院を巡回している敵兵はゆうに２００人は超えているそうです」
「そ、それを僕１人で……」
「単独潜入が三千院家のクオリティーだからな」
「続けますよ。
今から数分前に出した彼らの要求は、独自の軍事国家設立。つまり白皇学院を、日本とは独立した国にすることにあるそうです。
要求が４８時間以内に呑まれなかった場合、核弾頭を使用すると言っています。
もっとも、日本がその要求を呑むとは、とても考えられませんが、しかし……」

「え？」

「わからんのか？　白皇学院に通う生徒は皆、我が三千院家を始め、世界に幅広く名の通った大財閥ばかりだ。
　いずれ、自分の跡継ぎとなる存在、自分の宝だ。それを助け出すためだったら、世界に無理を通してでも要求を飲ませるかも知れないな」

そ、そういうことでしたか……。ただ無謀に白皇学院を狙ったわけではなかったんですね。

それにしても学校を国って……あれですか？　ハル〇クニですか？

「まさかとは思いますが、敵側に、黒猫がいるんですか？」

「黒猫……ですか？　黒猫はいないと思いますけど……」

そうか、流石に黒猫はいないな。良かった良かった。

……でも、例え黒猫が学校を守っているとしてもだ。僕は行かなければいけないんだ……。

大事な人たちを守るために。

「今回、私たちからハヤテくんに与える仕事、もとい任務は３つ。
１つは、本当に核弾頭が発射できるのかどうか確認して、それが事実ならば使用不可能の状況にしてください。
学校にミサイルサイロがあるという話は聞いたことも無いので、ＩＣＢＭ（大陸間弾道ミサイル）に核を載せて撃ちだすなんてありえないとは思いますが、万が一のことも考えましょう。
２つ目に、テロリストたちの戦力を、テロ行為が続行できなくなるぐらいに壊滅させてください。その時、ナギの安全を優先とした殺人は認めますが、それ以外は絶対にダメです。
これは政府からの正式な依頼ではなく、あくまで個人による仕事なので、殺した事実が世間に広まった場合、三千院家は終わりです。
そして３つ目。
……ナギたちを……お願いします」

……あのマリアさんが、僕に頭を下げている。

ピトッ

こちらからは見えない顔から零れ落ちた涙が、絨毯に染みとなって落ちる。

右を見ると、クラウスさんが神妙な面持ちで僕を見つめている。

左を見ると、タマとシラヌイが僕に縋るように見上げている。

マリアさんに頼まれなくても、僕の答えは決まっていた。

「わかりました。では、早速潜入に取り掛かりましょう！」

「ありがとう、ございます……！　服を用意しましたので、これを着てください」

スクリーンが上に上がったと思えば、今度は壁がグルンと一回転した。
その奥から、斬新としか言えないビジュアルのロボット――たぶん牧村先生が作ったんだろうな……――がカートを押して出てきた。
カートに乗せられているものは、光を浴びて黒光りする執事服。
外見は僕の着ているものとまったく変わらず、サイズも合いそうだ。

「この執事服にはある程度の衝撃を吸収する特殊合金繊維で作られています。

合金といっても、普通の服と同じくらい軽いですし、アサルトライフルで撃たれても問題ありません。

ついで防水、防寒、防湿など、あらゆる状況に優れています」

マリアさんから新しい執事服を受け取る。そんな中クラウスさんがダンボールを運んできた。
カッターナイフも使わず手刀でガムテープを切り裂いて開けると、中には一つの拳銃、箱に入っている何か、その他備品もろもろ。

クラウスさんは拳銃を１つ取り出して、僕の目の前に突きつける。

「いいか？　この拳銃はＭ９を加工したものだ。

実弾の代わりに麻酔弾を発砲し、敵を数時間の間昏睡状態に陥れることが出来る。マガジンは１０個。計１２０発ある。

一応実弾も撃てるように設計されてある。だが、実弾を使うのは牽制や威嚇までだ。麻酔弾がなくならないように気をつけろ。

実弾が学校の地下に武器倉庫があるからそこで調達しろ」

「な、なんで学校に武器庫が……？」

「あそこには昔、空爆に備えての防空壕があったんですよ。

その中にあった実弾や拳銃を、理事長が貴重な資料だといって武器庫を作り保存したと言っていました。

とは言っても、私が前に備品チェックで入ったときは現在使われている銃も入っていましたが……」

「続けるぞ。箱詰めされたこれはスタングレネードだ。

安全ピンをはずして投げると数秒後、強烈な閃光と超音波で敵の視覚、聴覚を一時的に封じ込める。その間に潜入するなり、敵を無効化するなりしろ。

あと軍事保存食料、通称レーションだ。腹が減ったときにでも食べるんだ。手に入れたアイテム等はこのバックパックにしまえ」

「はい」

クラウスさんからそれらの備品を受け取ると、着替えるために一旦自分の部屋に戻った。

自分の執事服を脱ぎ、新しい執事服を手に取る。

今回のミッション。失敗したら皆は……。

脳裏に、数々の友人とのエピソードが蘇る。

お嬢様との衝撃的な出会い、ワタルくんとの決闘、予備電源を復旧させる際の咲夜さんとのトラブル……ｅｔｃ……ｅｔｃ……。

お嬢様たちのためにも、失敗は……できない！

「そう力むからあぶねーんだよ」

「ふにゃっ！？」

驚いて後ろを振り返ると、タマが扉のところに当たり前のように立っていた。

いきなりやられると、いくらタマが二足歩行ができて人語、つまり日本語を喋れるというおよそトラらしくない行動が出来るということを知っていても、驚いてしまう。

「失敗は出来ない？　絶対助けなきゃ？　確かにそうだろーよ。

……でもな、そうやって自分を追い詰めるからいけないんだよ。それが焦りとなって冷静な判断が出来なくなる。

肩の力を抜けよ。お前は……今お嬢を助ける事のできる――――――

――――――唯一の人間なんだからよ」

タマ……お前……。

「それはわかったが虎に言われたくはない」

「てめっ……！　人がせっかく助言してやったのに！」

タマは案の定、目を三角に吊り上げて僕に襲い掛かろうとする。
やっぱりなんだかんだ言って、こいつも僕のことを心配してくれている。余計に仕事を終えて、ここに帰りたくなった。

「ありがとう」

そういうと、自分の部屋にタマを置いて部屋を出て行った。

「着替え終わりました」

「急いでください。時間がありませんので！　まずは……これを」

マリアさんはメイド服のポケットから注射器を取り出す。中身はかなり不気味な緑色をした液体が入っている。

僕に駆け寄ったと思ったら、なんとそれを注入されてしまった。

「な、なにするんですか！？」

「ナノマシンを注入しておきました。このモニターでハヤテ君の脳波、心拍数等確認できます。

それにナノマシンには耳小骨を直接振動させての無線が行えます。仮に敵に捕まっても無線連絡によるサポートは出来ます。

私の無線周波数は『１４０．８４』。記録も私が行います。記録用無線周波数は『１４０・９５』です。

クラウスさんは敵の情報を与えてくれます。周波数は『１４５．４６』。

敵の武器、装備の情報は牧村さんにお願いしてあります。周波数は『１８１．８０』です」

「わ……わかりました！」

早口でまくし立てられては、流石にＹＥＳというしかない。そのうちに理解できるだろうし。

「では、屋上にきてください」

三千院家屋上兼ヘリポート。
日本製の小型偵察用ヘリコプター『川崎　ＯＨ－１　ニンジャ』が既に離陸の準備を始めていた。

本当、お金持ちって何でもありなんだな……。凄いや。

「このヘリで白皇学院に潜入します。ロープでの降下となりますので、敵に見つからないようにしてください。
ヘリには偽装効果を施してありますが、ロープ降下中では流石に視認されてしまいます。潜入成功の合否はハヤテ君にかかっています。」

「わかりました！　三千院家執事綾崎ハヤテ……行ってきます！」

そう言って乗り込むと、すぐに小型ヘリコプターは学校に向かって飛んでいった。

この先、何が起こるかわからない。

核弾頭といわれても、その脅威は知っているが想像がつかない。それ以前に存在するかもわからない。

けれども、僕は、やらなくてはいけないことをやるだけなんだ。

2話『教訓・ロープ降下は危ない』

「綾崎さん！　そろそろ降下ポイントに到達します！」

「わかりました！」

パイロットの呼びかけに応えて、ドアに手を掛ける。風圧とかの関係でかなり重かったが、なんとかドアを開けた。
開けた途端に風が襲い掛かってきたが、気になどしなかった。

ヘリが疾走するその先に、ヴァ〇・ディール並に宮殿のような建物が見える。

あれこそが僕の母校であり、今回潜入する舞台。複雑だ……。白皇学院がどんな施設だったか知っているだけに、テロリストに襲撃されたという事実が未だに受け入れられない。
でも、校庭のあちこちに見える人影を見て、それが現実だということを思い知らされる。

「このヘリを旧校舎付近上空で停めます。傍にあるロープを取っ手に固定してください！」

昔、命綱一本だけのロッククライムのバイトをしていたときに覚えた技術がここで使えるとは思ってもみなかった。感謝しつつも、ロープを取っ手にきつく結わえつける。

うん。これなら大丈夫だ。

「間も無く着陸地点です！　準備はいいですか！？」

「はいっ！」

そう答えたまさにそのとき、ヘリが前進をやめて空中停止をした。

「急いで！」

ドアの淵に立って、深呼吸をする。どこかの奇妙な冒険を繰り広げている彼らは落ち着くとき、素数を数えるらしいが僕は違う。

降ろされたロープはヘリコプターによって起こる風で揺れているはずだが、錘をたらしたので問題は無い。

そんなことよりも、今まで培ってきたこの力、全てを出し切って皆さんを救います！

「三千院家執事綾崎 ハヤテ……突貫！」

僕はロープを掴んでヘリから飛び降りた。

僕が今嵌めている手袋がいつも使っているものならば、摩擦熱で手を痛めてしまう。けれど今つけている装備、手袋は馬鹿にできるような代物じゃなかった。

手袋も、今見につけている執事服と同じ特殊合金繊維でできている。どんな合金なのかは気になったが、とりあえず手の安全は守られている。

これならば、運が悪くない限り見つかることも……ん、なんだ？　何か聞こえてくる……。

「Ｔｈｅｒｅ　ｉｓ　ａｎ　ｉｎｔｒｕｄｅｒ　ｔｈｅｒｅ！！（侵入者だ！）」

えーと、これは中学生レベルの英語だな。意味は……侵入者があそこにいるぞ。だったかな？

……って、ええ！？　それマズイじゃん！　すんごい僕のことじゃん！

「ＨＱ！（作戦本部！）」

「Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ＨＱ．（こちらＨＱ。）」

あーあー。これ、まるでどこかのかくれんぼアクションゲームのような展開……。

「Ｈｅｒｅ　ｉｓ　Ｐａｔｒｏｌ．　Ｉ　ｄｉｓｃｏｖｅｒｅｄ　ｔｈｅ　ｉｎｔｒｕｄｅｒ．　Ｇｉｖｅ　ｔｈｅ　ａｓｓｉｓｔａｎｃｅ　ｆｏｒｃｅ　ｔｏ　ｍｅ．（こちらパトロール。侵入者を発見した。応援部隊を送れ！）」

「Ｃｏｎｓｅｎｔ．　Ａｎｎｉｈｉｌａｔｅ　ｔｈｅ　ｅｎｅｍｙ．
（了解。敵を殲滅せよ）　」

敵さんの無線が聞こえなくなってきたと思ったら、代わりに銃弾の嵐が僕に襲い掛かってきた。下を見ると、数人が僕に向けてＡＫ－７４を乱射している。

くっ！　何とかしないと……！

とりあえず、ロープから手を離す。この時点で危ないなんて言ってちゃダメです。銃弾に当たるほうがよっぽど危ないので。
幸か不幸か地上まで残り５ｍ。常人なら骨折、最悪死ぬかもしれません。ですが僕を舐めてはいけませんよ。
こちとら３歳からバイトを始めて、１３歳から麻雀で台打ちをして漫画を書いて賞金を荒稼ぎし、鬼武者ノ小路系ヤクザにみごと逃げ延びてきた。

この程度の高さ、ヤクザから逃げるために何十回と飛び降りている！！

「お、落ちてくるぞ！」

足から地面に付き、その後で受身をとる。受身を取らないといくら僕でも、骨折は免れない。ゴロゴロと地面を転がり、そのまま茂みの中へ。
体勢を立て直し、勢いを殺すために半ば無理やり両手を地面につける。横滑りになりながらも、どうにか収まった。

そんな時だった。敵の声が聞こえてくる。今度は新設にも日本語で話しているらしい。

「ＨＱ！」

〔こちらＨＱ！〕

「こちらパトロール。敵を見失った。これより警戒態勢に入る！」

〔了解！　警戒を強化せよ！〕

うわ～、ちょっと失敗したな。確かに、ロープ降下は目立ちすぎた。もう少し穏便に済ますべきだった。でも、これ考えたのマリアさんだよな？

とりあえず苦し紛れのカモフラージュにと、頭に葉っぱのついた枝を巻きつける。前にもこれをやったことがあるが、あの時はナギお嬢様が心配で真剣だったな。今も心配だけど、前と違って冷静でいられているのが不思議だ。

「マリアさん、聞こえますか？　こちらハヤテです。お待たせしました……」

〔はい、良好ですよ。今は旧校舎付近にいますね？　ではそこからなら宿直室が近いので、敵に見つからないようにして宿直室から校舎に潜入してください。

こちらの方でも三千院家の私兵部隊に救援を要請していますが、最低でも一日はかかります。援護についてはあまり期待しないでください〕

「宿直室ですね？　あそこは先生がいそうなので、協力してもらえ

るかもしれません」

〔一度クラウスさんに代わります〕

〔聞こえるか？　敵の装備は主にアサルトライフルだ。だが敵兵士のなかでもサブマシンガン、ショットガンやロケットランチャーを持つ敵もいる。〕

「どうやらここの付近にいる敵はＡＫ－７４、サーマルゴーグル……。それと、パイナップルを持っています」

〔グレネードか。注意しないといけないな。だがそれは敵も――〕

「いえ、それが……。どうやら非常食らしくて、見た感じ本物のパイナップルを持っています」

〔……〕

「そろそろ潜入を開始しますので、ナビゲーションをお願いします」

〔了解した〕

ゆっくりと立ち上がり、近くにあった「旧校舎立ち入り禁止」の看板に身を潜める。お嬢様のノートを取りに来たとき、これに気がついていれば……。

敵の数は先ほどよりも増えている。やっぱり見つかると、潜入も難しくなってしまう。しかし警戒網にも穴が存在するわけで、その穴は何処かと一生懸命考えていた。
敵の数はここから見えるだけでも１０人。うち5人がグラウンドの一部を警戒、２人が屋上付近、３人は校舎内窓近くか……。校庭を通るのが最適かな？　でも、上からの警戒にも隠れるように入り込むのは難しい……。

ふと視線をずらすと、なんと僕の近く、ついでに言えば他の兵士から離れたところに、もう1人兵士がいた。茂みに向けて銃口を向けている。いないと感じたら、他の茂みに映って同じことをしている。
よし。あの人の装備を利用しましょう。こっそりと看板から出てきて、傍にいた敵の1人に近づく。近づいている最中、敵兵は何かを呟いていた。

「なんでボスはここを占拠したんだ？　確かに下水道に電気、ガスは整っていて土地も広いけど、軍事設備は足りないどころか、無いに等しいぞ……？　核弾頭も、この感じじゃデマかな？」
あの人は、リーダーから何も聞かされていないのでしょうか？疑問に思いつつも、クラウスさんから譲り受けた麻酔銃をその背中につきつけ、口を開いた。

「動かないでください」

「！？」

兵士は振り返ろうとしたが、すぐに銃口を背中にわかりやすく押し

付けた後、地面にたたきつける。そうすると、兵士も観念したのか頭に手を組んだ。敵兵士からライフル銃とサーマルゴーグルを奪う。

「貴様……政府の手先か！？　まさか警察に連絡したんじゃ！」

「動かないで、口を閉じてください。僕は警察でも、政府の手先でもありません。自分が仕える主を守るため、身を尽くして闘う紳士……、執事です。では、眠ってもらいましょう」

そして素早く首筋に、強烈なチョップを喰らわせた。いくら彼らが英才教育を受けていようと、同じ人間。首筋に衝撃を受けたら意識は刈り取られてしまう。気絶した敵兵士を旧校舎の中にしまうと、服を脱がす。執事服の上に着、目だし帽を深く被る。熱が篭るが、これなら少しの間はばれない……。麻酔銃の代わりにライフルを持ち、歩き出す。

他の兵士は制服を奪って着ているとは思っていないのか、パトロールの配置を無視して進行する僕には無頓着だった。１回「どうした？」と聞かれたけど、トイレに行くといったらすんなり通してくれた。

だから、宿直室の窓に用意に近づけた。

3話『敵味方とは利益によって変わるものと知れ』

「あれ？　意外と静かだな……」

今僕は、宿直室付近の窓に耳を当てている。幸いにも周りに兵士はいないから、安心してこのようなことが出来る。

僕はてっきり、桂先生が敵に捕まってなお、「お酒が飲みたい」などと喚き散らしているか大暴れしているかと思っていた。

「鍵があいている……。とりあえず入ろう！」

窓を開け、宿直室に入る。……うっ。凄い有様だ……。以前宿直室に入った時よりも悪化している。桂先生の私物が以前にも増して散乱していて、酒瓶や空き缶で一杯だ。アルコール臭だけで酔いそうになる。窓を開けっ放しにしたいけれど、異変に感づかれてもあれなので窓を閉めた。

ん？　この変な感じは……殺気！？

〈ガシャァァァァン！！〉

「おわっ！？」

急いで壁に隠れると、僕が先ほどまで立っていた位置に無数の酒瓶が投げつけられていた。中身は飛び散っていないから、空瓶だ。どうやら火あぶりにするつもりはないみたい。

「危なかった……誰ですか！」

「あれ？　……んーとこの声は……。なーんだ綾崎君か！」

「この声……桂先生！？　無事だったんですね！？」

急いで壁から出てきて、目だし帽を脱ぐ。桂先生が宿直室のドアの傍で、空き瓶を大量に構えていた姿が目に入りこんだ。
けど、少し顔に赤みを帯びている。足取りもなんだか不安定だ。まさかこの人、こんな非常事態にお酒を飲んでいたんじゃないだろうな？　……この人なら、十分考えられるけど。

「問題なーい！　これでも先生だから！」

「理由になってませんけど……」

「でもまさか、侵入者が綾崎君とはねぇ～……」

「……は？」

……今、僕のことを侵入者と呼びませんでした？　一応、確認を取ろう。

「い、いや！　僕はテロリストの一員じゃなくて、ナギお嬢様をお救いするために――」

「そーんなこととっくに分かってるってーの」

「ま、まさか先生も……？」

「仕方が無かったのよ！　いきなり眼帯付けたお爺さんが『金とドンペリは大量にやるから仲間になれ』って言うからさ～」

この人、敵にお酒で買収されたんですかー！？　……ダメだ。この世には救いようのあるバカとそうでないバカがいるらしいですが、僕はてっきり桂先生は前者だと思っていました。まさか後者の方だったとは……。

「じゃあ、侵入者倒さないと金も酒ももらえないから……。殺すなんて言わない。出てって頂戴♪」

言うが早いかドンペリをラッパ飲みし始める。この作品を読んでいる大半の方なら知っているでしょう、桂先生がどのような教師かを。

白皇学院の世界史の教師で教え方は物凄いうまくて、ノリも軽い。当然生徒からの人望も厚いですよ？　けれど、信頼が厚すぎて生徒から呼び捨てにされていたり、補習をやるはずが野球を始めていたり……ｅｔｃ……ｅｔｃ。

お酒とお金に目が無くて、その二つのためならなんでもやってしまう。さらに酒を飲んだ後の先生は毘沙門天よりも強い。分かりにくかったら、全盛期のアントニ〇猪木よりも強いと言えば分かっていただけるでしょうか？

けど、おかしい。桂先生は犯罪をしてまで、お金とお酒が欲しいのでしょうか……？　ヒナギクさんにいつもいつも叱られているから、それはない筈なんだけど……。それにヒナギクさんも、今まで自分が教えてきた生徒も人質にされているのに。

「じゃーぁ、いくじぇー！」

「うわっ！」

突然ハイキックで迫ってきたので、急いで宙返りをして避ける。宙返りをした瞬間、時間がゆっくり進んでいくように感じます。多分錯覚ですがね。

「いたっ！」

……しまった。ここが屋内だと言うことをすっかり忘れていました。面白いぐらいに頭を天井にぶつけて墜落していく。

「もらった！」

続いて酒瓶を投げてくる。高速で投擲されたそれを握り、投げ返すも別の手に握られていた酒瓶に叩き落されてしまった。

「クラウスさん、応答願います！」

〔どうした？〕

「桂先生が敵として襲い掛かってきました……。説得するときに使える良いアイディアをください！！」

〔……金はどうだろうか？　酒もいいだろう〕

「僕は東○ＡＸさんみたいに一万円札で顔を拭いているような人間じゃないんですから！　それに桂先生はお金とお酒で買収されています」

〔じゃあ君に勝ち目は無い。ってことは執事も入れ替えるチャンスですな〕

「なにこんな非常事態にそんなことを！」

〔では連絡を斬るぞ。せいぜい頑張れ〕

「斬っちゃだめでしょー！？　せめて無線のときは切ると――」

「なーにをべらべらいってるのかなー、綾崎君？」

酒瓶による殴打攻撃をなんとか避けて、体勢を整える。追撃するように空瓶の遠距離攻撃。それもバック転で避け、苦し紛れに人形を投げるけどそれも弾かれてしまう。

この状況はマズイ。凄くマズイ。近づこうとするたびバーサーカー状態となって襲い掛かってくるのだから、打つ手が無い。このまま睨み合う隙も与えてくれず、桂先生は無限に存在する酒瓶を投げてくる。

やっぱり、説得しかないのか？

説得だな。

うおっ！　神父さん！？　なんでここに！？

まだ見終わっていない深夜アニメを確認しに行こうかなーと思って

鷺ノ宮家に行こうとしたら、偶然面白いところに出くわしたからな。

面白いって……。ていうか最近いないと思っていたら、伊澄さんの家にいたのですか。

羨ましいか？

いやいや、冗談を言っている状況じゃないのですが……。

そうだな、それもそうだ。時に少年、彼女の目を見てみると良い。

目？

神父さんに言われて目を見つめてみる。……桂先生の瞳が、濁りきっている……。お酒の飲みすぎか？　いや、桂先生はお酒を飲むたびに瞳が明るくなっていく。それはもう眩しいぐらいに。

神父さん、あれは一体？

彼女はいま、自分の意思で動いているワケではない。言い換えると、自我が何者かの意識で押さえ込まれている。

な、なぜ分かるんですか？

私は神父だ。人の表情、目、顔色などを見て、相手の心境を理解してあげる能力が必要なのだよ。彼女を説得するには、彼女の自我を呼び起こす必要がある。……彼女の大切なもの、何があると思う？

え～と……お酒にお金ですかね？

まだあるだろう。君が孤独になった時、必要なものが……。

孤独になった時？　いつも寂しかった。つらかった。じゃ、寂しい時やつらい時？　いつもお嬢様やマリアさんがアドバイスをくださったり、慰めてくれたり……。

まるで家族のように……

家族？

わかったようだな。では私は戻るとしよう

ありがとうございます！　「先生！」

「……」

先生は呼びかけに応えもせず、千鳥足の状態で酔拳の構えをしていた。

ちなみに酔拳は本当に酔っ払うわけではなく、独特の仕草やひょうきんな踊りで敵を惑わし、仕留める拳法だと聞いたことがある。

「本当に今回のテロに協力して良いと思っているんですか！？　この学校には、あなたが受け持っている生徒たち、それに貴方の妹、ヒナギクさんもいるんですよ！？」

「……ヒ……ナ……？

ぐ、グアァァァァァァァァァ！！」

突然先生は、苦しそうに胸と喉を押さえ苦しみを声に変えるように叫びだした。効果テキメンだ。もう一押し！

「先生、目を覚ましてください！　先生は実の妹であるヒナギクさんを、悲しませるようなことをしていいんですか！？　良いわけないでしょう！？

それに、先生が今まで教えてきた生徒たちだって悲しみますよ！

？」

「ギャァァァァァァァ！」

「誰だ！？」

「私に、触るな！！」

様子を見に来た兵士が桂先生の肩に触ったとき、先生は胸倉を掴んでその人をボッコボコにした。力なく崩れていく。

「キャァァァァァァ！！　……」

ある程度叫ぶと、桂先生は突然パソコンの電源を落としたように静かになった。倒れそうになるのを、急いで支える。

「先生、大丈夫ですか！？」

「……ん？　綾崎……くん？」

良かった。目の濁りも消えて、意識を取り戻せたみたいだ。

「確かここで酒盛りしてたら……いきなりガスマスクを被った男が私の顔に手を置いて――その後の記憶が……」

どうやら本当に、その後の記憶が無いようだ。どうして部屋に酒瓶（とその破片）が散乱しているかも思い出せないようだったので、事情を説明する。

「実は、かくかくしかじか説明以下略」

「な、そうだったのね……。わかったわ。綾崎くんへの詫びも兼ねて、ヒナたちを助けに行くわよ！」

「はい！」

こうして僕は、戦闘能力に定評のある桂先生を仲間に加えることに成功した。

「もしかしたら事件が終わった後、金一封をもらえるかもしれないしね～キャハハ♪」

最後の言葉は、聴かなかったことにしよう。

「……ボス。桂雪路の洗脳が解けてしまいました」

「お前の洗脳が破られただと？　一体誰に？」

「おそらく、侵入者でしょう。ぬかりました……もう少し時間を掛けて、あいつの心を壊しておけば……」

「いい、気にするな。心を壊すのはやめろと命令したのは、私なのだから。旧校舎に縛り付けた執事たちはどうなっている？」

「マグナム・キャットに任せています」

「おそらく奴らは、旧校舎の執事たちを助け出した後で生徒たちを奪還。生徒たちは……助け出した後、安全を確保した上で留まらせるだろうな。校舎内、ならび『アソコ』に辿り着くまでの道の警備を厳重にしろ。お前は、自習室で待機だ。侵入者は必ずそこに行く」

「わかりました」

4話『何処かで見たような光景と言う突っ込みは今現在受け付けておりません』

「こちらハヤテ。マリアさん、聞こえますか？」

〔大丈夫ですかハヤテ君！？〕

「なんとか桂先生を仲間にする事が出来ました。とりあえず人質の解放を目的にしているのですが……」

〔ＳＰの報告によると、東宮家の執事・野々原楓さん、大河内家の執事・冴木ヒムロさん、そして瀬川家の執事・虎鉄君が旧校舎の地下深くで軟禁されているようです。
今のままでは、助け出すのに人が足りなさ過ぎます。人質を解放するのであれば彼らの協力が必要だと思います〕

「野々原さんとヒムロさんはいいんですけど、虎鉄さんは……」

〔ま、まあ今回は協力するという形でお願いします〕

「わかりました……」

体内通信を切る。

正直、虎鉄さんは苦手なんだよな……。あの声を聞くだけで、悪寒が体中を駆け巡る。

『綾崎ー！！』

……ブルブル。

「先生、まずは旧校舎に行ってヒムロさん、野々原さん、虎鉄さんを救い出します。その後で生徒の皆さんの救助に向かいます。彼らを救い出せれば、きっと皆の救出も楽になると思います」

「旧校舎ね？　わかったわ！」

桂先生が相槌を打つのを合図に、僕たちは宿直室をあとにした。

刻（とき）は少し戻りハヤテが桂雪路の説得を試みている頃。高等部2学年のとあるクラスでもあることが起きていた。

「教えてくれませんか？　なんでこの学校を襲撃したの？」

白皇学院の生徒会長、桂ヒナギクはテロリスト相手に恐れることなく質問をしていた。

……1つ上の文章には若干の間違いがあり、実際には彼女も少しは

怖いと思っている。がしかし、生徒会長である自分が威厳を持って接しないといけない、生徒にトップである自分が怯える姿を見せてはいけない、と彼女は思っているため彼女は恐怖を内面に押さえ込んでいるに過ぎなかった。

ちなみに、１つのクラスにあたっている警備は４人。２人が前と後ろの扉周辺を警戒し、１人が教室内をぐるりと見回る。残る１人が担当の教室近くの廊下を見回る。

ヒナギクが話しかけたのは、教室内をぐるりと見回っている兵士だった。

「お前には関係ない。さっさと戻れ」

「ちょっと、関係ないことないでしょう！？　私たち人質なんだから！」

「人質だったら黙って言うこと聞いていろ！！」

「桂さん、落ち着いて……」

「ちょっと、東宮君は黙ってて」

テロリストに軽くあしらわれてなお、食らいつくヒナギクを落ち着かせようと東宮は肩に手を置くが、その手をヒナギクは払いのける。

「か、桂さん？」

「あ、ごめん」

東宮の驚いた顔を見て、ヒナギクは謝罪の言葉を言う。ヒナギクに

問われたテロリストはヒナギクに背を向けた、そのとき。

「おい、ボスからの通信だ！」

別の男がそう言うと、ヒナギクたちを閉じ込めた兵士全員がイヤホンに手をかける。ヒナギクの耳に、イヤホンからわずかに漏れてきた音が入ってきた。

「ボス！　どうしましたか！？」

――子音の発音の仕方がアメリカ人みたいだけど、流暢な日本語ね……。

ヒナギクは素直に感心していた。

『お前たちが警備しているクラスに桂ヒナギクと言う生徒がいる。念のためにいるかどうか確認しろ』

「何故？」

『さっき届いた情報では、生徒たちでトップクラスの戦闘力を誇るのは、旧校舎に軟禁した執事３人衆、先ほど話した桂ヒナギク、そして侵入者綾崎 ハヤテ』

「それで？」

『そこに桂ヒナギクがいた場合、旧校舎屋上に移すんだ。桂ヒナギクは高所恐怖症らしいからな。高いところにいれば抵抗はしないはずだ』

「了解」

『それと、東宮康太郎という生徒は自習室に移せ。そこには特別お金持ちの生徒を軟禁してある。まとめておいたほうが警備も楽だ』

「しかし、それで大丈夫なんですか？」

『サイコ・マンティスＪｒに守らせている。問題は無い』

「了解しました。……ここに桂ヒナギク、東宮康太郎はいるか！？」

テロリストの１人が銃を生徒たちに向けて生徒たちに聞く。銃を向けられたと言う恐怖のあまり、生徒たちは思わずヒナギクと東宮の方に顔を向ける。

「え、ええ！？　僕！？」

「私たちに何の用かしら？」

ヒナギクはとうの昔に知っていた。それでも、怪しまれぬように聞いてみる。

「お前か。お前を旧校舎屋上に移す。そっちの男は自習室だ。立て」

『……』

「アルティマーノ、１人で大丈夫か？」

「大丈夫だベスター。格闘技術もない奴らに、遅れをとるとでも？」

アルティマーノと呼ばれた男は自動小銃を掲げ、覆面が歪むほどの笑みを浮かべて答えた。
その様子に嫌悪感を抱きつつも、ヒナギクは何も言わずに静かに立ち上がる。東宮も諦めたようにため息をつき、立ち上がった。テロリストの1人はヒナギクの腕を、1人は東宮の腕を掴んで外に出る。

1人が廊下にいる仲間に駆け寄る。

ヒナギクはその隙を狙って木刀・吉宗を呼び出し、コテンパン叩き潰そうとおもったがやめた。
理由その1。人質が自分以外にもいて、敵は3人。全員銃を持っている。
理由その2。その人質のもう1人が、頼りにならない東宮だから。
実質彼女2人、最悪3人を相手にすることになる。
銃を持った相手に、間合いが限られる木刀で1人で挑むのは非常に危険だ。
理由その3。ライフルの銃口を頭に突きつけられていたので、奇襲作戦は諦めた。

「桂さん。僕たちどうなっちゃうんでしょう……？」

「……わからない」

そう答えるしかなかった。

「5分で戻る。それまで中の生徒を見張っていろ」

「わかった。急いで戻って来いよ」

――ハヤテ君なら……どんなに遅れても私を、私たちを助けにきてくれる……。人に頼るしかないなんて凄い歯がゆくて悔しい。でも、頼るしかない。

脳裏でハヤテの微笑みを思い浮かべるとつられて微笑し、テロリストたちに連れて行かれた。

そして時と場所は変わり、ハヤテと雪路は旧校舎1階にいる。

「さてと。困ったなぁ……」

首を動かして上を見て、下を見て。首を横に動かして右を見て、左を見て。それを何度か繰り返す。けれど目に入る風景が変わるわけも無く。

「どうしたん？」

「それが、地下に続く道がここしかないんですよ、幾ら探してみても……」

目の前には、大きな穴が空いた床が風のせいでビュウビュウ唸っていた。

ここの穴は以前、お嬢様のノートを取りに来たときに間違えて旧校舎に入って、その時に空いたもの。ここの近くで、ヒナギクさんが人体模型に襲われていたのを思い出した。

「え？　まじっすか？」

流石の桂先生もここから地下に行くのが嫌なのか、顔が引きつったように歪めて穴を見る。

ふぅ……、仕方がありませんね。

「先生は上に行って敵の情報を調べてください。主に警戒態勢の確認、装備。武器や食べ物も見つけられたらなるべくお願いします。これを」

肩にかけていたライフルに弾丸を込めて、先生に投げ渡す。僕には必要の無いものだ。

「え？　な、なにこれ綾崎くん？」

「Ａｋ－４７です。第二次世界大戦の頃から使われている古い銃ですが、現在でもゲリラ軍が喜んで使っている信頼のある銃です」

「い、いやだから何で私に？」

「もしものときのためですよ。僕は元々部外者だったのに忍び込んだので色々とアレですが、桂先生は元々人質。正当防衛と言うこと

でなんとかなります」

「……人、撃つの嫌なんだけど」

「それは僕も同じです。弾の撃ち方は二つ、ここで切り替えが出来ます。セミオートとフルオートの二つがありますが、撃つときはセミオートが良いと思います。1回引き金を引けば弾が一発出ます」

「へぇ〜。てっきりこういう銃って1回引き金を引くとバババッて弾が出るかと思っていたわ」

「フルオートにするとそうなりますが、多分発砲の衝撃に耐え切れませんよ？　それにセミオートにすれば、狙ったところだけに当たるので安心です」

逆に言えば、狙えば人を一発で殺してしまう、ということだけれど。でも先生は絶対人殺しをしないと思う。

……ん？

「あの、先生どうしました？」

「く、詳しいわね綾崎くん」

「昔、一度だけこういう仕事をしていたことがありましたから。上の方はお願いします。僕は氷室さんたちの救出に行ってきます」

今は一分一秒の時間が惜しい。後ろを振り返ることなく、臆すことなく穴に飛び込んだ。

タッ

少しだけ飛んだあと、地面に足が付いた。去年は背中から落ちて気絶してしまったが、あの時は床がもろくなっていると知らなかったから。

周りを見渡すと、人っ子一人いない。子供がいないのは当然だけど、人がいなさ過ぎないか？

おかしい。

氷室さんや野々原さん、虎鉄さんはトップクラスの戦闘力を誇っているはずなのに、警備が薄いどころかまったくいない。もしかしたら罠かもしれない。慎重に行こう。

ギシッ　ギシッ

床がもろくなっているのか、床を踏むたびにギシギシと危なげな音が辺りに鳴り響く。さっきも、床がまた抜けて落ちそうになったところだ。

それにしても、本当に誰もいない。１回誰かいると思ってライト（麻酔銃についていたペンライト）を向けても、それは人体模型だった。

「あれ？」

行き止まりかな？　今来た道以外に通れるところが無い。今まで直進してきただけだったから、ここが旧校舎の端っこかな？　廊下は壁に閉ざされて、両隣にあるのは教室だけ。
変だと思って隣の教室に入ってみると、行く手を閉ざしている壁が異様に厚い。試しに壁を叩いてみると、

コンコン

空気に響くような音がした。なるほど、壁の向こう側に部屋があるんだな？
廊下に戻って壁を良く見てみると、セメントで埋められたような跡を見つけた。

「こちらハヤテ。３人が捕らえられていると思われるドアを発見。突入します」

〔了解しました。記録に残しておきますので安心して突入してください〕

こういうものを壊すときには普通、爆弾を使う。でも今爆弾は持っていない。なので――

「はっ！」

ガラガラ……

拳に力を込めて殴ってみると、壁は脆くも音を立てて崩れ去った。
そしてその穴の向こうに……。

「ヒムロさん、野々原さん！

と、虎鉄さん」

「む？　むっ……」

3人は猿轡で口をふさがれ、麻縄で柱に立った状態で括りつけられていた。しかし凄い。こんな状況下でも、騒ぐことなく落ち着いて僕を見ているなんて。虎鉄さんはなんだか危ないオーラを発しながら発狂しそうだけど。

でも、3人をこんな風に出来るほどの実力の持ち主って一体……？

それに、3人だったら麻縄どころか、ワイヤーも余裕で引きちぎっちゃいそうなんだけどな。

「待っていてください。いま縄を解きますから」

「むっ！　むむむっ！」

ん、なんだろう？　僕が近づこうとすると、3人が必死にムームー言い出したぞ？　まるで、何か重要な事を伝えたいかのように。僕に伝えたいことでもあるのかな？　とりあえず、縄と猿轡を外さないと――

「やめておけ」

「！？」

突然声が聞こえてきたので、歩みを止める。声が聞こえてきたのは、僕が入ってきた入り口と正反対のほうにある入り口。

「そいつらの周りにはワイヤーを張ってある。それが一本でも切れたら……見てみろ」

誰かに言われたので、ワイヤーの先を目で追っていく。その先にあったものは――

「ば、爆弾！？」

「そう、プラスティック爆薬だ。いくら執事と言えども至近距離からの大量の爆薬の衝撃に、どれだけ持つかな？」

「誰ですか！」

M９（麻酔銃）を声がした方向に向ける。何者かはそれに気づいたようで、嘲笑しだした。

「はははははっ！　最近の日本人は女も撃つか！」

「姿を見せてください！」

「まあ、いいだろう。俺の名前は『鳳凰院　優』。またの名を……『マグナム・キャット』だ！」

優と名乗ったその人の格好は……一言で言うとカウガール。ウェスタンハットを目深に被り、小さな車輪のついた革ブーツ。ハットから獲物を狙うように研ぎ澄まされた眼光を放つ、黄色い瞳に鮮やかな金髪。それでいてグラマラス。もはやアメリカ人では！？

と思ってしまった。

「侵入者がよもや噂の三千院家の執事とは……。いいだろう、俺が相手をしてあげる！　ゲームでな」

「ゲーム？」

「ルールは簡単だ、この部屋全体を使ってやろう。柱を中心に円を描くように走り回り、相手を銃で仕留めた方が勝ち。俺が勝った場合、お前とこいつらの命はない。こいつらは、お前を呼び出すための保険に過ぎなかったからな。お前が勝ったら爆弾を解体してやろう！

さあ、どうする！？　といっても乗らなかったらこの学校を破壊するがな！」

「くっ！　……分かりました」

「わかればいい……では行くぞ！」

5話『VSマグナム・キャット』

「では行くぞ！」

優さんは言うが早いか拳銃を構え、発砲してきた。弾が、薄く煌くワイヤーとワイヤーの隙間を縫う様に潜り抜け、迫ってくる。なんとかギリギリのところで弾道を見切り、顔を逸らして避けた。

それにしても、この人の早撃ちは凄い。速すぎて、もう少しで頭に穴が空くところだった。

使っている銃は多分、Ｍ６８６。「ディスティングイッシュド・コンバットマグナム」とも呼ばれる、リボルバーだと思う。

リボルバーは装弾数が６発と少なめで、１回撃つたびに撃鉄を起こさなきゃいけないから、次に撃つまでに多少の時間がかかる。だから、使う人はあまりいない。

反動もそれなりに大きいのに、肘を上手く曲げてやわらかく吸収している。その上で、一発一発が速いなんて……！

っと、感心している場合じゃなかった。今も弾丸が髪の毛に掠った。耳にも掠ったようで、右耳が少し熱い。僕が時計回りに走り出すと、優さんも時計回りに走り出す。

今だ。走り出したその瞬間に生まれる隙を見計らい、Ｍ９の引き金を引く。三発撃ったうちの、一発は――

「ムゴッ！？　……ＺＺＺ……」

む、変態に当たってしまった。なんであんなところに居るのかな、邪魔だな。どちらにせよ、優さんに届くことはなかっただろうけど。

「キャハハ！　俺には当たらん！」

氷室さんたちを縛り付けている中央の柱が、壁になって残りの弾丸の行く手を阻んだ。うち一発は氷室さんの顔からそう離れていないところに着弾。

気をつけないと、氷室さんと野々原さんに当たってしまう。……虎鉄さんはどうでもいいけど。

敵の情報を得るためにもとりあえず、適度に応戦しながらクラウスさんと連絡を取ることにしよう。

「クラウスさん、『鳳凰院　優』と名乗る女性とただいま交戦中！　彼女について何か教えてください！」

〔なに？　鳳凰院　優だと？　……『鳳凰院　優』は２５歳から今までの４年間、ＣＩＡ、ＦＢＩなどの軍事的組織を点々と回っていたベテラン中のベテランだ。一時期にはＳＥＡＬｓにも参加、訓練を受けていた。

彼女はあらゆる武器に精通したスペシャリストだが、いつもマグナムを使っていた。また、猫のように軽い身のこなし、素早く敵を射止める姿から『マグナム・キャット』と呼ばれるようになった。

彼女の通り名の由来ともなったマグナムには、彼女なりの細工が多数施されている。本来Ｍ６８６の装弾数は６発だが、１０発に増えている。それを二丁携行している。跳弾（ちょうだん）には気をつけろ。

また、彼女は非常に残虐な思考の持ち主にして、好戦的な性格だ〕

「……情報をくれと頼んだのは僕ですが、詳しくないですか？」

〔マリア、説明を頼む〕

〔……実は彼女が２４歳の時、姫神君の前の、一ヶ月の間だけ……ナギの執事でした。

ですが性格上問題が発生して、解雇したんです。多分、テロに参加したのも、誰かと戦いたかったからだと思います。

その後の行方が心配で、密かに詳細を調べていました。まさか、こんな所で役に立つなんて……皮肉ですよね。

彼女は薬に対する免疫が低いので、ハヤテ君に渡した麻酔銃を４，５発撃ちこめば眠らせられるかと〕

「わかりました。絶対食い止めてみせます！」

無線を切り、接近戦を仕掛けようと走る。

「そうそう。この感じだ！」

しかし優さんはあざ笑いながら、僕から逃げる。柱の周りをぐるぐる回る。お互い、銃を撃ち合いながら。

「この緊張感、なんともたまらない……！」

こうなれば銃撃戦しかない。発砲音を消す意味も無いので、Ｍ９に

ついていた消音機、サプレッサーを外すと引き金を引き絞る。

「甘い、坊や！」

麻酔針は優さんの体に突き刺さる前に、マグナムによって撃ち落されてしまった。

「三千院家も落ちたものだな！？　こんな貧困そうな顔の男を執事として雇うなんて！」

「う？！」

うう、グサリと何かが体に突き刺さった……。流石に何回も言われているとはいえ、慣れない。というよりもむしろ、慣れたくない！にしても、撃ちだされた弾丸を、弾丸で撃ち落とすとは……。注意を散漫させて、隙を作ろうかな？

「何であなたは、今回のテロに参加したんですか！？」

「あー？　決まってるだろ。殺戮に至る、強いやつと戦う正当な理由が欲しかったんだよ！　名義があれば、それだけ戦いもしやすいってもの。野暮なことを聞く坊やだな？
　そんなんじゃ結婚できないよ？」

「生憎、僕は借金を返しきるまではお嬢様の傍に居ないといけないんですよ！」

「……堅いねぇ。堅いよ、あんた。仕事に根詰めすぎだ。それとも、仕事だと割り切ってるのかい？　第一、あんな小娘の何処がいいんだ？

我侭を言うわ、思い通りに行かなければ誰かに当たるわ、外出するのが嫌で部屋に篭りっきり。挙句、頭だけは妙にいいから変に育った。そりゃ確かに心の奥底では、アイツの優しさも、可愛らしい一面もあることも、まだまだ子供だなと思うところだって……。俺が執事として傍に居たときと変わらない。

いや、変わろうとする努力をしていないじゃないか。

そんなお嬢さんの下で、４０年も働く？　マゾヒストかってんだ。借金があるとはいえ、他の仕事で稼ぐ手だってあるだろうに。

もしかしてナギのことが好きなの？　ロリってやつ？」

鳴り止まぬ銃声をＢＧＭに、僕たちの討論が続く。

最初は、彼女の隙を作るために差しさわりのない話題を振っただけだった。でも今は違う。少しイラッときた。お嬢様に一ヶ月間お仕えしていただけで、なにがわかるというんだ？　彼女に本気で伝えたい。僕の想いを、彼女に伝えたい。

「……マゾヒストでも、ロリコンでもありません。お金のためだけに働いているわけでもありません。

初めて出会ったとき、僕はお嬢様を営利誘拐しようと企んでいました。それでもお嬢様は、僕に仕事を与えてくれました。

温かいベッドと温かい食事を、僕に与えてくれました。

僕に思い出を作る機会をくださりました。

お嬢様のしてくださった事は、お嬢様自身特別なことではなかったのかもしれません。単なる気まぐれかもしれません。ですが僕にとって、人生をかけてでも返さなくてはならない恩を貰ったのです。

恩義を与えてくれた人に、そんな邪な目で見ません。僕は、お嬢様への恩返しのためにも、執事をしている。今あなたと戦っているのも、その一環なんです」

「……けっ。少しは芯のある坊や。にしても、ナギも報われないねぇ……可哀想に。あんたの想いは、坊やの心には通じない。坊やの心は別のところ、か」

「どうしてお嬢様のことを可哀想と思うのかはわかりませんが、そう思うんだったらもうこんなこと、やめてください！

あなたは知っているはずです！　お嬢様がどうして、ああいう性格になってしまったのか。あなた自身が一ヶ月の間に何度も見てきたはずでしょう！？

お嬢様は今、少しずつだけれども……変わろうとしています！

僕たちが、お嬢様が変わる支えになっています！

それに、あなたは5年前に執事として就任した。お嬢様はその時まだ9歳。何故、今のお嬢様の状態をご存知なのですか？」

「……！？　俺のこと、説得できると思ってた、ガキ！！」

今の一言が、彼女を逆上させたようだ。マグナムを片手に一丁ずつもち、乱射してきた。何とか避ける動作に移ったが、数発が体を掠める。

……疑問だ……。多分この人は、お嬢様を、いやもしかしたら、お嬢様だけは大切に思っていたのかもしれない。

だったら……なんでこんな！

「……しまった。弾切れか！」

チャンスだ！

弾切れに気づき動揺している大きな隙を、僕は見逃さなかった。

両腕を地面に水平に持ち上げ、自分の銃を構える。

視線の先に居るのは、今倒すべき敵。過去も未来も関係ない。僕のために。皆のために。なによりお嬢様のために！

僕は、引き金を引いた。

「……！？」

《ヤレヤレ……ヨウヤク見ツケタゾ。綾崎ハヤテ……オレノ――『？？？』》

最後に何と言ったのかは、聞こえなかった。

ただ１つはっきりしていること。

突然現れた機械が、刀で麻酔弾を一刀両断していた。

5話『VSマグナム・キャット』（後書き）

最近は進学先から出された宿題で終われる毎日。
更新スピードが遅めになっていますが、これからもよろしくお願いします。

6話『決着……？』

その人の風貌は、一言で言うと奇異なものだった。

全身に張り付くような、それでいて頑丈そうにも見える鎧に身を包み、エヴ〇の初号機のような一つ目が、ど真ん中に据えてあるマスク。その一つ目が、機械的な赤が怪しげに光り輝いている。

腰に下げられている鞘の中身は、今はその人の手の中。刃が、刃だけが微かに震えているのが見える。いや、あれは振動しているのか？

兎にも角にも、僕が優さんに向けて放った麻酔弾は、その人によって斬りおとされてしまったのだ。

それにしても、誤算だった。まさか近くに仲間がいるとは思わなかった。いや、僕自身が優さん以外に敵が見当たらなかったことで油断していた。

この状況は、マズイ。狭い室内で、接近戦を得意とする敵と銃撃戦を得意とする敵がいる。共闘されたら、一巻の終わり――

「あんた、何者？　なんのつもりだ？　折角興奮できたってのに、邪魔を――」

《コレハ、俺ノ獲物ダ。貴様ハ消エロ》

そう言うと（これからは便宜上、忍者と呼びます）、忍者が刀を優さんの喉下に突きつけた。速すぎて、僕は一連の動作を全て見切ることが出来なかった。

優さんは、そんな状況に置かれていてもなお、忍者をにらみつける。
も、

「……チッ。綾崎ハヤテ！　邪魔が入った、また会おう！！」

刀を握っている右手を蹴り飛ばした直後に、優さんはマグナムを乱射する。忍者は已む無く刀で弾丸を弾いたが、もう優さんは逃亡に成功していた。
……どうやら、仲間ではないようだ。そしてそれは、僕にも当てはまる。

《ヨウヤク。ヨウヤク、オ前ト闘ウコトガデキル。闘イノ中デ、俺ノ生キ方ヲ見出セル。サァ、楽シマセテクレ》

忍者が、僕に迫ってきた。速い、僕の必殺技『疾風の如く』と同じ、いやそれ以上！？

「うおっ！」

後ろに転がってなんとか避けるも、忍者は追いかけてきた。

《フッ、フッ、フッ、ハッ！》

切り返しのように連続で振り下ろしてくるのを危ういところでかわして、足払い。

《イイゾイイゾ、モット楽シマセロ！》

足を狙った蹴りは跳んで避けられたが、これも予想範囲。跳んで動きが制限されたところに、顔に銃口を突きつけた。

「チェックメイトです」

《イイセンスダ。ダガ――》

グサッ　ダンッ　ヒュオッ

忍者は、僕が引き金を引く数瞬前に、刀を地面に突き刺した。引き金を引いた瞬間に、彼は刀を軸に空中で一回転する。数ｃｍも無い距離から、弾丸をかわされた！？

彼は刀を1回手放すと、今度は格闘戦に移った。僕も対応する。お互い牽制するように、小さく細かいパンチを何度も繰り返す。と言っても、お互いに繰り出すパンチは細かくても、一発一発に込められた重みが違う。それに相手には、何かしらの想いも込められている。そんな感じがした。

と、忍者が左腕を大きく振りかぶった。今まで小さい動作で重い攻撃をしてきたのに、オーバーアクション？　……罠か！？

パシッ

《ホォ……流石ダ。ダカラコソ、ヤリ甲斐ガアル……》

顔面を狙った左の拳を左の掌で受けた後、鳩尾を狙った右拳の奇襲を右手で防ぎ、そのまま間接を極める。しかし、いとも容易く抜け出されてしまった。多分、自分で間接を外したんだと思う。極まったと思ったのに、手応えを感じなかったからだ。

バック転をして距離を詰めようとする忍者を、僕は走って追いかける。立ち上がった瞬間を狙って、ハイキック。

《甘イ》

これは両手で防がれてしまった。真剣白羽取りみたいに。その際忍者は右足を後ろに蹴り上げ、刀を引き抜いた。落下コースにあるのは、僕の足！

「くっ！」

足を戻そうにも、忍者が足を離してくれない。仕方なく、僕はもう片方の足を地面から離した。

《ウオッ！？》

ドサッ

二人して地面に転ぶ。しかし、刀の強襲から逃げることが出来た。

僕は銃を、忍者は刀を握ってお互いすぐに起き上がり、距離を取る。

氷室さんたちを縛り付けている柱を挟んで、僕たちは対峙した。

《……コレグライデ、十分ダロウ》

「なんですって？」

《マタ、何処カデ会オウ》

言うが早いか、忍者は言葉とは裏腹に、僕に刀を突き出してきた。しかし、彼は僕を斬らなかった。代わりに斬ったのは、柱に縛られた氷室さんたちの麻縄と――

――その周りに光り輝く、ワイヤー。

ドォォォォン　ドォン

僕が伏せると同時に、柱が爆発した。急いで後ろを振り返っても、あるのは無数の刀傷のついた壁だけ。

「大丈夫ですか！？」

「ああ。大丈夫だ」

「おわっ！」

思わず驚きの声を上げてしまった。僕の後ろに、氷室さん、野々原さん、虎鉄さんが平然とした様子で立っていた。無事だったのは確かに嬉しい。とはいえ、流石に驚いてしまう。

「き、傷どころか服も焦げてすらいませんね……」

「麻縄が斬られた瞬間に、僕たちは上に飛び上がったんだ。爆発から何とか逃げ出すことが出来た。衝撃自体は伝わってきたが、問題は無いよ」

「なるほど……って野々原さん。確か執事研修でイギリスのほうに留学していたのでは？」

「ご主人様から、早急に戻ってくるようにとの命令が下されたので、休学扱いにしてもらってこちらに戻っていたんです。

それで邸宅に着き、ついでにお坊ちゃまのご様子を見ようかと思い学校についたら、あの女性に一杯やられてしまいまして――」

「綾崎ぃぃぃぃぃ！！！」

「おわっ！？　虎鉄さん！？」

ゴッ

野々原さんの解説の最中、変態が僕の腰に抱きついてきたので顔面にエルボーを入れる。

「ひ、酷いじゃないか綾崎。いきなりエルボーを入れるなんて……。
それにしても、俺を助けてくれたのか！　普段はツンツンしているのに、こういうところでは優しいなお前は！　ああ、これがツンデレと言う……」

その後も何か言っているような気がするが、僕の耳に入ってこなかった。もしかしたら、体が変態の声をシャットアウトしているのかもしれない。

ああ……なんだろう。この心の奥底で渦巻く、黒い黒い衝動は。今、目の前にいるこの人をつぶしたい。

プチッ

何か千切れた音もした。野々原さんの顔も心なしか引きつっている。
でも構うもんか。

……潰す！

ギャァァァァァァァァァァ……。

「……綾崎君はこれほどまでに強かったかな？　どう思う、野々原

君」

「坊ちゃんもこれぐらい強ければよいのですが……。さて綾崎君、これからどうしますか？」

「上の階に桂先生がいるはずなので、とりあえず一度外に出て状況確認、ならび桂先生が戻るまで待機します」

「わかった。で、彼はどうする？」

氷室さんが薔薇で指す方向には、なんか異臭を漂わせているゴミが……

「復活！　愛のパワーは海を制す！」

「ちっ！」

ゴミが立ち上がった。思わず舌打ちをする。

とりあえず、立ち上がった虎鉄さんもつれて、僕たちは部屋を後にした。

一方その頃雪路は、とんでもない光景を目の当たりにしていた。

「な、なんでヒナが！？」

その光景とは、ヒナギクが縄で縛られかつ屋根の淵に座らされ、その無抵抗のヒナギクに複数の覆面を被った大人が銃口を向けているものだった。

7話『疾風に舞い上がる雛菊のよう』

私はあの後、旧校舎の屋上――正確には、旧校舎の屋根の上――に連れて行かれ、屋根の縁のところで縛られた。

……こういうのが趣味な兵士じゃないだけ、マシ……？　でもここ結構高いのよね……。

いやいや、後ろさえ見なければいいのよ！　誰かに押されさえしなければ、落ちることも無いわ！

「おい、なんだか下の方騒がしくないか？」

「ああ……誰か様子見に行くか？」

私も確かに気になっていた。私がここに縛られたとき、体育祭で聞くようなガスガンの音と、硝煙の臭いがこちらに漂ってきた。多分、あれは本物の銃声で、これはそれを撃ったときに漂ったものだと思う。

「いや、リトル・ボスからの命令がある。ここから離れるな。確かに気にはなるが……」

「でもこいつ、確か高所恐怖症だろ？　別に1人いなくなってもいい気がするが……一応縄で縛っているし」

男が1人、マシンガンの銃口を私に向けながら言う。人に銃向けるのは、止めて欲しいわね。

それよりも！　私は高所恐怖症じゃないわよ！　ただちょっと目がくらむだけなんだからね！

……なんて、言い返したい。でも今の状況じゃそれも無理。それ以前にハンカチで口を塞がれている。

とりあえず、この人たちが皆何処かに言ってくれれば、屋根から所々はみ出ている瓦で縄を切ることができる。

逃げ出せた後は、皆を助け出さなきゃ！

「リトル・ボスに聞いてみるか？」

「駄目だ。さっきの無線でしばらく指示が出るまで緊急時以外無線はするなといっていた。

……ところで、侵入者はなんて名前だったっけ？　あ、あや……あたざきサツ？」

「綾崎 ハヤテだよ。サツって読めるけど、ハヤテって読むらしい」

「あ～そうそう！　そんな名前！」

聞いていると、ハヤテくんはまだ掴まっていないみたい。私の居場所、わかるかしら？

……私も、なんだかんだ言って女の子だな、と思う。普段からそういう自覚がないわけじゃない。むしろ女の子として振舞っているつもりだ。

でも、周りからは格好良いとか、男の子らしいとか……。正直へコむ。

とりあえず、ハヤテくんが此処に来てくれれば、全員を助けることができるんだけど……。

いや、1人でもやるつもりよ？　全員を助けられないで、何が生徒会長よ。

でも、いくら経っても彼らが動く気配が無い。全員、ここに残ることにしたみたい。

ウー、ここにいる人は3人。せめて1人でも向こうに行ってくれれば、隙をついて正宗を償還できるのに。

……やっぱり、都合のいいようにはいかないものね……。

「こらーっ！　ヒナを放せ～！！！」

「だ、誰だっ！？」

そんなことを考えていたら、突然耳に入り込んできた聞きなれた声。
間違えるはずも無かった。小さいときからずっといるもの。顔を上げる。

扉の近くで、手を腰に当てている人は私のお姉ちゃん、桂雪路。
いつもは、グーダラでどうしようも無いお酒飲みで、しょっちゅう色々な人からお金を借りているのに――今はとても頼もしい。

「ヒナを放しなさい！」

「なんでこいつがいるんだ！？　サイコ・マンティスの洗脳は！？」

「俺に聞くなよ！」

「くそったれが！」

「んーっ！（お姉ちゃん！）」

男が一斉にお姉ちゃんに向けて、銃を撃った。お姉ちゃんは弾丸の雨の中を、怯えることなく駆け抜けていっている。
いつもの様子からでは考えられないほどの速さで――。

決して、私の、私の目から目を逸らさずに、駆け寄ってくれている。

それが嬉しかった。

……やだ、涙で見えにくくなっちゃった。

「お前ら！　よくもヒナを泣かせたな！」

バカね、お姉ちゃんのせいよ。

「ぐあっ！」

「な、なんだこいつは！？」

「や、山姥だ！　山姥に違いない！」

そんなことはお構いなしに、お姉ちゃんは懐から何かを取り出した。手は使えないので、首を振ってなんとか涙を振り払う。

あれは……芋焼酎！？　な、なんで芋焼酎なの！？　と、私が驚いている間に焼酎瓶の蓋を親指で弾くようにあけると、それを一気飲み。

「……っ……ひっく。さぁ～いくじぇー！」

……？　お姉ちゃんにしては、酔いが回るのが早いわ……。そんなに前からずっと飲んでたの？

この非常事態に……お姉ちゃんったら……！！

「ぐおっ！」

お酒と言うドーピングを得たお姉ちゃんに敵はいなかった。雑な殴りで、重装備の敵を数mは殴り飛ばした。

「す、スピードが速くなったぞ！？　酒を飲んだだけなのに！？」

「さ、酒を飲んでヒートゲージが上がりやすくなってる、攻撃力も半端ねえ！」

「ヒナ！」

お姉ちゃんは残った敵を無視して、私のもとに駆けつけてきた。でも、後ろからバンバン撃ってくるんだけど。

いたっ！　頬に弾が当たったみたい。……でも、そのお陰でハンカチが切れたみたいで、私は口が楽になった。

「お姉ちゃん！！」

「ヒナ！　伏せなさい！」

お姉ちゃんは私を庇おうと飛び込んできた。たぶん自分が上になって弾を守ろうと考えていたみたい。

でも失敗が三つ。

一つ、私は立ち上がろうとしていた。

二つ、私がいるところは旧校舎の屋根の上。しかも淵である。

三つ、お姉ちゃんは酔っ払っていて、力加減が出来ていない。

だから私は……お姉ちゃんに突き飛ばされた。

「え？」

「ひ、ヒナ！　掴まって！」

お姉ちゃんが私に手をさしのべたけど、もう遅かった。

私は不思議なくらいにゆっくり、でも実際には早かったかもしれない。

自分じゃよくわからない速度で落ちていく。

私、ここで死んじゃうの？

旧校舎といっても結構な高さがあるみたいだし、なにより恐かった。
自分が堕ちていくのが。

友達とももう会えないのが。

大切な『彼』に、もう会えないのがどうしようもなく悲しい。

せめて最後ぐらい、彼に会いたかった。

思い

っきり抱きしめたかった。

そして……私の気持

ちを打ち明けたかった。でももう終わり。

けれども最後は……

…彼の名前を呼んで、死に逝きたい。

諦めるなんてらしくないけど、ダメ。高いところから落ちているせいで、怖くて力も入らない。

勇気も沸き起こらない。

彼は呼べば必ず来るといってくれた。

たとえ私が助からなくても、彼の姿を見たい。彼の笑顔が……。

≪ヒナギクさん≫

彼の、まぶしいぐらいの笑顔が！

「……ハッ、ハヤテくーん！！！」

ドサッ

……あれ？　どこも、痛くない？　それどころか、なにかに抱きかかえられて飛んでいるような。

私は恐る恐る、瞼を開ける。

「あ……」

「お待たせしました、大丈夫ですか？　ヒナギクさん」

「お、遅いわよ……」

私は泣きながら笑った。うれし泣きか、それとも怖かったから泣いているのかわからない。
それでも、、私が愛する人が私の目の前で微笑んでくれている。それだけは、とんでもないぐらいに嬉しい。

私は彼に抱えられて飛んでいる。少し恐いけど、彼の笑顔が、体で感じる温もりがその不安、恐怖を打ち消してくれた。

私はもう少しその余韻に浸りたかったけれど、彼が着地したのがわかった。

7話『疾風に舞い上がる雛菊のよう』（後書き）

高校が始まってしまい、忙しくなりがちで更新スピードも遅くなっています。

楽しみにしている皆様には申し訳ありませんが、これからもよろしくお願いします。

8話『誘われし疾風』

「それにしてもヒムロさん、どうしてあんな状況に陥っていたのですか？　虎鉄さんはともかくとして、ヒムロさんと野々原さんの実力なら捕まるなんてなかったはずですが……」

失礼と思いながらも、つい聞いてしまった。

虎鉄さんは馬鹿そうだから、何かにつられたのかもしれない。だからまだわかるけれども、ヒムロさんが柱に縛られるなんて考えもしなかったから……。

「何故私だけそんなひどい言い方をするんだ！　やっぱり流行のツンデレ――」

「違うに決まってるでしょう！！　あなたの脳みそはカニミソですか！？」

とりあえず、変態は軽くあしらうつもりだったのに反応してしまった。

「そうだね……1つヒントを教えようか。お金は、生きていく上で最も大事なことなんだよ。

愛よりも金だ。愛ではご飯は食べていけない、お金が必要なんだ

よ」

氷室さんは爽やかに、どこか陰りを感じさせる発言を堂々を言ってのける。

えと、それはつまり、お金につられて縛られたってことですか？

それが本当なら、桂先生なみじゃないですか。

「……冗談……ですよね？」

「やれやれ、冴木くんも冗談が過ぎますよ。

綾崎くん。僕らが捕まった本当の理由は、我々の主がここの生徒たち同様捕らえられて、それをネタに僕たちを脅したからですよ」

「野々原くん！」

「冴木くん。綾崎くんに心配を掛けたくないのは分かりますが、いや、あなたの場合は、自分の責任だから自分でケジメをつけたい。そういう気持ちですね？

兎にも角にも、たった一人ではいくら我々執事であろうとこの状

況は乗り越えられません」

野々原さんの言葉に、氷室さんが珍しく激高したような声で、止めようとする。

しかし野々原さんも負けじと、声は張り上げなかったがきつい語調で反論すると、氷室さんは口を閉じた。

……あれ、おかしくないか？　氷室さんの主の大河くんは、確か小学生４年生。

今日は職員研修の日で、今の時間だったら、もう家に居るはず……。

「お恥ずかしながら、私は冴木くんをとどめたんですよ。坊ちゃまの安全のために」

「でも、野々原くんのしたことは執事として正しい行いだった。僕も人の主を死なすほど馬鹿ではないから、すぐに抵抗を止めて大人しくしていた。

その後縄に縛られていた。縄を切って逃げようと考えていたんだが、筋弛緩剤を打たれてね……。

で、柱の周りにワイヤーを張られて、出るに出られなくなったのだよ」

（筋弛緩剤とは、神経、細胞に反応し、筋肉の動きを弱め力が入りにくくなる薬。

ちなみに、使い方を誤ると臓器の働きも止まってしまい、三途の

川をスキップしながら渡ることになってしまう）

「ということは東宮君が捕まったということは、泉さんや花菱さん、朝風さんも……」

「ああ、お嬢にいつもくっ付いている2人か。……多分一緒だと思う」

虎鉄さんは珍しく、物憂げな表情を浮かべていた。

こんな変態でも主人である以前に、自分の実の妹である瀬川さんと、その友達が人質になっているとなると不安なんだな……。

あ、出口だ。

「出口みたいですね」

「では早く行きましょう！」

助け終えていない人がたくさんいることを思い出し、駆け足で出る。

ふぅ。流石に廃墟の中にいたので、息苦しかった。外の空気は新鮮ですねぇ～……。

「では、桂先生を待ちましょう」

「僕は大河内家に戻るとしよう。大河坊ちゃんが心配だからね」

「では私も、校舎の周りを探ってきます」

ヒムロさんは校門に行き、野々原さんも竹刀を取り出して校舎の方へ。

時間を持て余すことになった。とりあえず、麻酔銃の点検をしておく。

先ほどの戦闘で壊れたところは見当たらない。大丈夫そうだ。

視線を逸らすと、虎鉄さんは時刻表を取り出してぶつぶつ何か言っているところが見えた。

もしも「新婚旅行」なんて言い出したら、血の塊にしてやろう。

「綾崎」

「どうしたんですか？」

咄嗟に後ろに下がる。何か分からないが、殺気、いや寒気が背筋を駆け巡ったからだ。

また何か、嫌な予感がする。

「よ、ようやく2人きりになれたな……」

「……はい？」

「慌てるな、綾崎……落ち着くんだ」

「息の荒い人に言われたくないですよ！」

「つれないなぁ……。男が2人きりで、寝そべるのに良さげな空き地があるんだぞ？　やることは1つじゃないか……」

「普通の男の人はそんなことしませんよ！　それに、瀬川さんたちのことが心配じゃないんですか？」

「もちろんだ。だけどそれよりも、俺はお前と———合体したいんだ！」

「くそったれが！」

いや、僕が「くそったれ」と言った訳じゃないですよ？　それに近い言葉を言いそうにはなりましたが。

突然上のほうから叫び声がして、それと共に銃声が聞こえてきた。

「お前ら！　よくもヒナを泣かせたな！？」

え？　この声って桂先生のだよな？　それにヒナって……ヒナギクさんのことか？

見上げてみると、ヒナギクさんが屋根の上で縄で縛られ、ハンカチで口を塞がれていた。

「ってああ！！」

ヒナギクさんの口を縛っていたハンカチがひらりと取れ、風と共に何処かへ行く。その数瞬後に、頬から滴り落ちる赤い血。

何処の誰ですか、ヒナギクさんを傷つけた人は！？　と、とにかく階段を使って上に行かないと！

「虎鉄さん、急いでください――」

「ウキュー」

しまった！　さっき異様な目つきで迫ってきていたから、反射的に殴り飛ばして気絶させちゃったんだ！

仕方ない、急いで中に入って階段から――

君はもう忘れたのか？

「――――――え？」

平和ボケしたこの世界の中で、君は大切な者を守る力を手にしたというのに。

……神父さんですか？　お屋敷に戻ったのでは？

いや、それが帰ったのは帰ったのだが……。録画設定を間違えて、前日に放送していたドラマを途中から撮っていたんだ！　流石に嫌になってきた時に、君の事を思い出したので、面白そうだから来てみた。

面白そうって……。

いや、そんなことはどうでも良い。君は急ぐ必要がある。心の奥底にある、彼女という存在を救いたいはずだ。

「心の――奥底？」

自覚は無いのか。まったく君という男は……朴念仁というか、フラグ立てまくりな我々の敵というべきか。

君は、その人たちを護る力を持っているはずだ。

僕が、大切な者を守る力を持っている。何かを忘れているような……。

Bダッシュアタックじゃよ、ルー〇・スカイ〇ォーカー。

おお、天使ですか！？　ヒナ祭り祭り以来ですね。

私のことを覚えていたくせに、肝心の必殺技を忘れるとはな……。

合言葉は「Ｂｅｅ」じゃよ。ではさらばじゃ。頑張って彼女を救うのじゃ。

そうだ、僕は忘れていた。

平穏な世界に慣れ親しみすぎて、お嬢さまたちを護るための力の存在を、今の今まで忘れてしまっていた。

大切な人を守り抜く力を……。

イメージをするんだ！！　君の心が誰かを守る力になるから……
再びイメージをしろ。
それを具現化する力を、君は再び思い出すのだ、少年。

僕の心が、護りたいという想いが、僕の力の源になる。

イメージをするんだ。

大切な人を守るための力のイメージを。

お嬢様も、マリアさんも大切だ。もちろん、その周りにいる、僕を、お嬢さまを支えてくれる皆も。

ヒナギクさん、あなたを護りましょう。

僕が行かなければならない。守りたいんだ。

誰よりも速く――――。誰よりも速く――――――、

君の元へ駆けつけて！！

文字通り……疾風のごとく！！！

「……ハッ、ハヤテくーん！！！」

ヒナギクさんが、誰かに突き飛ばされたのか、屋上から落ちている。

間に合え！　ヒナギクさんが地面に落ちてしまう前に！

「うおおおおおっ！！！」

「お待たせしました、大丈夫ですか？　ヒナギクさん」

「……フ、フフフ……お、遅いわよぉ」

彼女は笑いながらも、泣いていた。彼女が無事で、本当に良かった。

8話『誘われし疾風』（後書き）

高校生活が始まり、中々暇を作り出すことが出来ず、更新が遅くなって申し訳ありません。
一週間に一回のペースで更新することを目標にしたいと思いますので、これからもよろしくお願いします。

9話「ごめん、ギャグって難しいや」

今の2人は、羽だった。一枚の羽のようにふわふわと落ちていく。雪路も、テロリストたちも、その事実に驚かされるばかりで、唖然とした顔で彼らを見ていた。

そんな視線を浴びながら、地面に足を付け、ハヤテはヒナギクをゆっくりと降ろす。

「さて……何処の誰です？　ヒナギクさんに傷をつけた人は……？」

ハヤテはゆっくりと立ち上がると、雪路にやられて倒れている敵兵士も含め全員にたずねた。

いや、聞き方こそは穏やかながら、その口調の奥底に含まれた冷たさはまるでナイフのようで、テロリストたちはそのナイフを、自分たちの喉元に突きつけられているという『錯覚』に陥った。

言葉だけではない。今のハヤテに笑顔は消えうせている。冷酷と呼ぶに相応しい表情で、睨み付けていた。視線も言葉も気配も、全身が鋭利な刃物となってテロリストたちに襲い掛かっていた。

「綾崎くん……？」

雪路は、彼の怒りの有様に唖然となり、ヒナギクも違う意味で、雪

路同じく唖然となっていた。頬を赤く染めるという特典をつけて。

「……ヒナ……やっぱりね。私は、奥に引っ込んでいようかな」

雪路は、そそくさとその場を後にした。逃げたわけではない、空気を読んだといっておこう。

「誰ですか？　さぁ！」

「う、うるせぇ！」

ハヤテの無言の威圧に耐え切れなくなった1人が、サバイバルナイフを取り出して突っ込んでいくのを機に、意識のある残りのテロリストたちも同様に突っ込んでいった。

「は、ハヤテ君！」

「心配は要りません」

ヒナギクの心配を他所に、ハヤテは軽く笑うと、M9を取り出して1人の頭を撃ち抜く。殺傷能力はないものの、麻酔弾によってその撃たれた男は、呆気なく眠りについてしまう。

その直後、4人が一斉にナイフを振りかざす。

その光景に、ハヤテは軽くため息をつくと同時に姿を消した。

「ホワット！？」

「ど、何処にいる！！？」

「此処ですよ」

突然視界から消えたハヤテを探し、周りをキョロキョロと探し出す。
ハヤテの声に3人が振り返ると、ハヤテは1人の首を絞め、体を盾にしていた。
流石の兵士たちも、手にしたサブマシンガンで仲間を撃つわけには行かないため、動きを止めてしまう。

ハヤテはその隙に、盾にした敵の体越しから麻酔銃で2人を眠らせ、自分の「盾」を首絞め、意識を削ぎ取る。その間約2秒。

そしてさらに気絶した兵士を残りの1人に向かって突き飛ばす。それで1秒。
突然の衝撃に体制を立て直せず倒れ、仲間を退けようともがく。
眠っている一人からナイフをもぎ取り、もがいている1人の首元にナイフの切先を持っていった。

戦闘開始から、およそ２０秒で終結した。

「聞きたいことがあります」

「な、なんだ！？」

「誰がヒナギクさんの頬を傷つけたんですか？」

ハヤテの問いにヒナギクは、思い出したように頬の傷を触る。ヌルリと、生温かい血が手に触れた。まだ少し痛むようで、彼女は驚いたように手を離す。

「し、知るわけないだろ！？　皆銃をバンバン撃ってたんだからよお！」

「じゃあ次。この人は今何処で捕らわれているかご存知ですか？」

ハヤテがナイフを突きつけたままポケットから1枚の写真を取り出す。その顔の持ち主の特徴は、輝く金髪を纏めたツインテール。ここまで言えば察しのいい読者様ならわかるだろう。わからない方は次をどうぞ。

その写真の人物は、目は半目で、無愛想な顔をしていた。

「あ、ああ。知っているさ、確かそいつは他の生徒と一緒に自習室にいるはずだ！　確か他の生徒も一緒だ！

た、頼む、助けてくれぇ！」

「では最後の質問。メタルギアはどこにありますか？」

「ね、ねぇハヤテくん、メタルギアってなに？」

「すみません、ヒナギクさん。少しだけ静かにしていてください」

「……！？　……わかった」

ヒナギクは、あっさりと引き下がった。普段のヒナギクならば、少々怒った顔をして反論するだろう。「何で、いいじゃない！」と。だが今回は違う。

状況が？　いや、彼女がそれぐらいでは戸惑う事はない。では何故か。

それは綾崎ハヤテと言う男が持つ冷酷な『眼』であった。

彼女は今まで見てきた、ハヤテの表情は常に笑顔、考え込んだような可愛らしい顔。そして時折みせる落ち込んだ顔。

その一つ一つが愛らしいもので、またこちらを笑顔にさせてくれる温かいもの。

だが、今回のハヤテの表情は、読み取れない何かがあった。

その冷たい表情で作られた、マスクの下に何があるのかが。そして普段は明るく輝く眼も、怒りと寂しさ、そして何か黒いもので濁っていた。

その異様さを感じ取り、ヒナギクは引き下がったのだ。

「き、貴様、メタルギアのことを何処で！」

「貴方に質問をする権利はありません。質問に答えてください」

「……っ！！　それだけは言えない！　俺らはボスに忠誠を誓ったのだからな！」

「リトル・ボスですか？」

「ああ。俺らは、この組織に入る前は軍兵として、人殺しの毎日を送っていた。それが祖国のためだと信じて……だが政府の奴らは俺らをあっさりと捨てた！

そして窮地に陥った時地獄から救い出してくれたのは……リトル・ボスだった。

俺らは彼に絶大な信頼を抱いている。だから俺はメタルギアの情報は一切いえない！」

「でも、その言い方は、少なからず此処にあると言っている様な者ですよ？

まあいいでしょう。では、お休みなさい」

「さ、最後に言わせろ！」

「なんでしょうか？」

切羽詰った兵士が、叫ぶように頼んできたのでハヤテも甘んじてそれを受け入れた。

「お前とその向こうにいる女……ラブコメってんじゃねぇぇ！！！！」

「……！？／／／／／／」

「……」

ハヤテは額に怒りを象徴するマークを浮かべ、素早くＭ９の引き金をひいた。男は抵抗の色を見せたが、間もなく眠りについた。

兵士が眠りにつき、ハヤテは立ち上がる。妙な静寂の空気が、流れ出した。

「……」

「さ、大丈夫ですか？　ヒナギクさ――」

ハヤテは途中で言葉を切り、唐突に、瞬間的に、刹那に顔を紅くしだした。いきなりヒナギクが、彼の胸に飛び込んできたからである。

「ど、どうしたんですかヒナギクさん！？　もしかして、頬の傷意外にも何処か怪我を――！」

「だい、丈夫。でも、怖かった……」

ヒナギクが、ハヤテを締める腕の力を強めて、自分の顔を更にハヤテの胸にうずめる。その様子を見てハヤテは、狼狽しながらも頭を撫でた。

人は彼女を「文武両道才色兼備完璧無敵生徒会長」と呼ぶが、それはその人たちの主観に過ぎない。彼女は、まだ成人していない１６歳。花も恥らう乙女である。

この状況で頼れる、自分が好意を抱く人間が助けに来たのだから、成り行き（？）とは言え抱きついてくるのは当然。

そして眠る間際に敵が言った『ラブコメってんじゃねぇぇ！！！！』の言葉が、さらに彼らを後押ししているようで……。

「あ・・・あり・・・ありがとうハヤテ君……」

「ヒナギクさん……」

ハヤテは恥ずかしいと思いながらも、更に右手でヒナギクの頭を撫で、左手で彼女の腰を支える。

そしてその状況が１，２分続いた後、ヒナギクは顔を上げる。埋めていたところは、涙で薄っすらと湿っていた。ハヤテも見下ろして、互いの顔を見る。

そして２人は顔を近づけていく。

３０ｃｍ。顔を赤らめながらも互いの瞳を見つめあいながらゆっくりと……。

２０ｃｍ。お互いの気持ちの整理はついてきた。

迷いはない。

１０ｃｍ。ヒナギクはまぶたをゆっくりと閉じ、顔を少し突き出す。

ハヤテもそれに応え、近づける。

５ｃｍ。ハヤテは顔を僅かに横に傾け、そして……。

「頑張れ、ヒナ！」

こんな時でもちゃっかりしている雪路が、ビデオカメラを回しながら応援の言葉を述べている所から少し離れたところで、２人の唇は……。

「ヒ、ヒナギクさん、ごめんな――」

「綾崎ぃぃぃぃぃぃ！！！　大丈夫かぁぁぁぁ！！！」

突然虎鉄が雪路を吹き飛ばして、扉を蹴破って二人の傍に駆け寄ってきた。無論雰囲気台無し。

2人は磁石の同じ極を近づけた時の状況と同じぐらいに離れあう。

「あ、綾崎ぃぃぃぃ！！　泉はおろか、まさか生徒会長にたぶらかされていたとは！」

「何を言ってるんですか虎鉄さん！！！」

「そ、そうよ！　私は別に……ってハヤテ君！　もしかしてこの人と！？　ど、同姓なのに？」

「男同士で何が悪い！」

「話を紛らわしくするなぁぁぁ！！！」

ハヤテはとうとうブチ切れた。虎鉄をボッコボコに、しかもヒナギクに見えないぐらいの速さで行う。

物質的ダメージ＋摩擦熱で、虎鉄の執事服はぼろぼろになっていたのは、言うまでもないこと。それでも虎鉄は不屈の闘志で、ハヤテに抱きつこうと躍起になっていた。

「ちっ！　金になったのに……」

「あら？　お姉ちゃんもしかして覗いてた？」

「ひ、ヒナ！？　いつからそこに！？」

「生徒会長には神出鬼没のライセンスがデフォルトで備わっているのよ。

……それで？　そのカメラは何？」

「あ、いやぁ。最近でも珍しいキスシーンをこのカメラに収めようと……って私は何本音を言っちゃってるの！？」

「とりあえず――正宗ぇぇぇぇぇ！！！」

「え、ちょ、ヒナ！？　争いじゃ何も解決しないのよ！？　平和を実現するのに戦争はダメなのよ！？」

「コンのバカァァァァ！」

「ギャピィィィィィィ！！」

悪は、滅びた。

後日伊澄が正宗から聞いた話によると、正宗に宿る神秘的な力が、ヒナギクの異常なまでのダークオーラに怯えていたという。

さらに、虎鉄はのちに、生徒大半からは『神』と崇められ、本人と関係する人たち（ハヤテとナギを除く）からは『空気の読めない変態』と囁かれるようになるのは別の話となる。

１０話『姿が見えないって、それなんてプ〇デター？』

ハヤテが無事、ヒナギクを助け出したその頃、大河内家では。

「ただいま帰りました。タイガ坊ちゃん」

「あ、お帰り～！　おやつ作ったけど食べる？」

玄関を颯爽と駆け抜けるヒムロの声を聞きつけ、タイガがミキサー片手に駆け寄る。
その姿を視界に入れて、ヒムロは微笑む。

「申し訳ありませんが、また学校へ行かなければなりません。暇を貰ってもよろしいでしょうか？」

「いいよ～♪」

「ご主人様は何処に？」

「お父さんはパレスチナに行ったよ～。一週間ぐらいで戻るって！」

「タイガ坊ちゃん。もしかしたら、帰るのが明日になるかもしれません。もし今日中に私が戻らなければ、次の日は学校をお休みしてください。ご主人の指示です。
あと、このことは主人も知っていますので、このことは口にしな

くても問題はありませんよ。
食事は……ご自分で作れますよね？」
「う、うん！」
取り繕うように、タイガは笑顔を見せる。
ヒムロは嘘をついた。今日起きたテロについて、タイガの父親から、そのような指示を受けているはずもない。
タイガを何だかんだで思いやる、ヒムロの気遣いだった。
だがこの少年も、健気なものである。悲しげな表情を浮かべながらも、氷室の前では、精一杯笑おうと努めているのだ。
「ヒムロがいないのは悲しいけど、いってらっしゃい！」
「すぐに戻れるよう努力しますので。戻ってきたら食べますので、おやつは残して置いてくださいよ？」
「――！　うん！！」
先ほどとは違う笑顔を、タイガは作った。

ハヤテたちは下に降りる途中で野々原と合流し、旧校舎内にある武器庫の中にいた。野々原を除く全員が武器庫を見上げている。

武器庫の中には小型銃から仕込み刀、昔使われていた銃剣に、挙句の果てには重火器まで置いてあった。

「なんで、この学校にこんな所が……？」

「とりあえず、スティンガーとプラスティック爆弾は必要だな。」

「綾崎君、ＰＳＧ－１の麻酔銃モデルがありましたが、使いますか？」

野々原から素早く狙撃銃を受け取り、分解してバックパックにしまう。

「ありがとうございます。スモーク・グレネードとスタン・グレネードを探してもらってもいいですか？」

「はいはい」

「ね、ハヤテくん」

「はい？」

「なんでそんなに、銃器のことに詳しいの？」

「……あーっ、えーと。とりあえず、執事だからってことにしておいてくだしあ！」

「最後噛んだわね……ま、いっか」

そんなこんなで十数分。彼らは各々の使いたい武器を選び終えた。
一覧表を乗せておこう。

桂　雪路：デザート・イーグル　スタン・グレネード　ＡＫ－７４
　酒瓶（空き含め）　スティンガーミサイル　Ｃ４爆弾

野々原　楓：竹刀　ＵＺＩ　スモーク・グレネード　スティンガーミサイル　Ｃ４爆弾

虎鉄：竹刀　Ｍ９（実弾）　スティンガーミサイル　Ｃ４爆弾

桂　ヒナギク：木刀・正宗　防弾チョッキ

冴木　ヒムロ：薔薇手裏剣　盾　スティンガーミサイル　Ｃ４爆弾

綾崎　ハヤテ：Ｍ９（麻酔弾）　ＰＳＧ－１（麻酔弾）　スタン、スモーク・グレネード　スティンガーミサイル　Ｃ４爆弾

「では、外に出ましょう」

「やぁ久しぶり」

「どぅわ！　氷室さん！」

ハヤテは外に出ようと扉を開けた、その入り口に氷室は堂々と立っ

ていたので思わずよろめいた。相手が氷室とわかり、冷静を取り戻す。

「貴方の武器も一応とってきましたよ」

「ふむふむ……悪いけど、僕はこの薔薇で十分だ。あとで売って小金でも稼がせてもらうとして……誰かと思えば生徒会長さんではありませんか。なにやら事情はわかりませんが、とりあえず捕まっていた彼女を助け出したということかい？」

「まあ、概ねそんな感じよ」

「いいのかい？　この戦いは過激を極める。死ぬかもしれないよ？」

「なら、なおの事生徒会長として、他の生徒が心配じゃない。そろそろ行きましょ？」

ヒナギクは淡々と応えると、外に出ようと足を踏み出した。

「少し待っていただけませんか？」

『え？』

「ま、マリアさん！？」

ここにはいるはずの無い、マリアの声に一同は驚きの声を上げる。
正確には、氷室を除いた一同、と言う意味だが。

「ここですよ」

次の瞬間、ヒムロの右隣からまるで幽霊のように、しかし幽霊にしては急にマリアが現れた。

「い、いつからそこに！？」

「ずっといましたよ？」

「で、でもさっきまでは冴木さんしか！」

「ヒナギクさん、その理由はこれですよ」

マリアはそう言うと、エプロンドレスについてあるポケットから何かを取り出す。今まで誰も見たことのない形をした、ワッペンのようなものであった。

「これはステルス迷彩です。自分の周りの光の屈折率をこの装置が科学的に変化させ、周囲に溶け込むことのできる究極の迷彩です。

つい先ほど三千院家の技術班が、これをあわせて3つ完成しましたので、届けにきました。はい、桂先生とヒナギクさん」

マリアはポケットから先ほどと同じ物を二つ取り出すと、ヒナギクと雪路に渡す。彼女たちはマリアにならい、ステルス迷彩をそれぞれのポケットに挟んでスイッチを入れる……。

「き、消えた!?」

「凄いわね～三千院家って」

「ありがとうございます。マリアさん」

と、今度はまったく同じ場所にヒナギクと雪路が現れた。

「では、これからの作戦を言います。まずはこの学園内にいる人質を全員助け出します。

彼らの手中に人質がいる限り、迂闊に手出しが出来ません。慎重に、誰にも見つからずにお願いします。

理事長と教頭先生は、敵のボスのすぐ近くにいるらしいので、後に回します。

次にこの敷地の地下深くに存在する小型核弾頭搭載歩行戦車「メタルギア」の破壊です。メタルギアさえ破壊すれば、彼らの脅しもなくなるでしょう。

そして三つ目、テロ組織【インサイド・ヘブン】の創設者、【リトル・ボス】の捕獲、又は殺害です」

「って……殺してはダメなのでは？」

「三千院家の衛星写真によると、昇降口は検問がしかれてあって入り込めません。そのため旧校舎から潜入をします。

旧校舎が使われていた頃は戦争の真っ只中で、防空壕としてグラウンド、今の新校舎の職員室に繋がっています。

そこからなら潜入できるはずです」

流石は元白皇学院生徒会長、考える作戦の質が違った。

「私は一度三千院本家に戻らないといけません。ですので失礼させて頂きます。無線でのサポートなら続けられますので、何かあれば知らせてください」

「帰り道、気をつけてください」

「ありがとう、ハヤテ君」

マリアはそう言って立ち上がると、走り出す。そして数歩走ったあと、姿が見えなくなってしまった。

そこでヒムロが立ち上がる。

「提案だけど、まとまっていて行動をしていても生徒の救出に間に合わない。敵に見つかる確立もあがる。少し危険だが、このメンバーを三等分したいと思う。

そうすれば一人が危険にさらされてももう一人が助けに入れるし、三等分なら仕事の効率もいい」

「ならば桂先生と生徒会長だけは別々にした方がいいと思うのですが」

野々原が立ち上がって意見を言う。

「強いといっても女性ですからね。では僕の薔薇を使ってのくじ引きをしよう。出た花の色と同じ色がでたらその人たちで組んでください」

そして結果が……1班「虎鉄　ヒムロ」ペア

2班「ハヤテ　ヒナギク」ペア

３班「野々原　雪路」ペアとなった。

座っていた人たちが全員立ち上がり、円陣を組み始める。

「恐らく職員室の床から出ると思います。先生たちの見張りには、必ず敵兵士がいます。スタン・グレネードを投げて敵の視界を奪います。

そのあとで敵を拘束、３班は先生たちの介抱を、その後生徒達の救出に向かいましょう！」

ハヤテがそう言うと、彼らは互いの顔を見合う。円陣を解き、野々原は竹刀を上段に構えた。

「セーフティーシャッター！！！（最弱版）」

振り下ろされた竹刀は焔を上げ、龍が吼える。龍が床に噛み付くと、大きな穴が空いた。

ハヤテを先頭にヒナギク、虎鉄、雪路、ヒムロ、そして最後に野

々原が穴に入っていった……。

１０話『姿が見えないって、それなんてプ〇デター？』（後書き）

更新が遅れてしまい申し訳ありませんでした。

次回の更新は、来週の木曜日、または日曜日を予定しています。

『ＳＷＡＴっぽいそんなお話』

ハヤテたちは、元々防空壕として使われていた地下通路を使い、校舎内への潜入を図っている真っ最中。

高さも幅も相当のもので、壁は土の上から鉄筋とコンクリートで補強してある。元防空壕だけのことはあった。

時折、涼しさを感じさせる風が吹き込んでくる。防空壕が密閉空間だと、即座に窒息してしまうからであるのだが、ハヤテたちはこれには大いに助けられた。彼らは元々大所帯なので、蒸し暑さも感じていたのだ。

ハヤテはペンライトを上手く使って、暗闇が支配するみんなの足元を照らしていた。

彼らは一言も口を開くことは無かった。それは冷静さゆえなのか、恐怖ゆえなのか、はたまた緊張からくるものなのか。それは彼ら自身にしかわからない。兎にも角にも、一向は黙々と進んでいた。

数分。数十分？　それとも数時間か？　流石のハヤテといえども、こう暗い闇の中を一筋のペンライトの灯りを頼りにしていては、時間の感覚が失われていく。そんな時。

ふっ。

灯りが消えた。

「あいたっ！」

「何！？　電池が切れたの！？」

「いえ、僕が躓いただけです。でも、どうやらこの坂を登ると職員室みたいですよ？」

ハヤテがそう言って立ち上がり、再びスイッチを入れて前方にペンライトを向ける。

ペンライトで照らされたところには坂道が続いており、５０ｍ程先のところで行き止まりとなっていた。

「これは……元々あった入り口を、コンクリートやら岩で塞いだようですね」

「そこから導き出される答えは、ここは元々防空壕の出口。となると……」

「……この上が、職員室か……」

「じゃあ、スタン・グレネードを持っている人は確か綾崎君と桂先生だったね？　上にある床をはずして、４，５個投擲しよう」

「それでその後私たちが突撃、犯人を気絶させて職員たちの確保ですかね？」

「そうなりますね」

そうやって、着々と作戦の段取りを決めていく一行。

「殺してもいいか？」

虎鉄がそう尋ねた。

彼にとっては、何気ない（かもしれない）一言。それは、氷室と野々原においても同じこと。

彼ら執事は、主の身に危険が迫るとき、または主に危害を及ぼす輩と遭遇した場合、如何なる方法でもそれを排除せねばならない。危険因子は、疑う前に殺れ（やれ）。それが、戦闘執事（コンバットバトラー）の宿命である。

虎鉄においては、自分の主が実の妹なのだからなおさらのことである。

それでも、執事としてまだ未熟なハヤテと、一般人のヒナギク、雪路にとっては考えさせられる、一言であった。

「虎鉄さん。人は、なるべく殺さないでください」

「なるべく……？　君は本当に、心から主を救いたいと、思っているのかい？」

「氷室くん！」

「野々原くん。君もわかっているはずだよ？　……ま、今回は極力、人は殺さないように心がけるよ」

「……では床を開けて下さい」

言い知れぬ空気の中。野々原に言われて、ハヤテと雪路は天井を押す。気味の悪い音と、少量の砂埃と共に明かりが差し込み、次には完全に職員室の様子が見渡せるようになった。

ハヤテが顔をにゅっと出すと、教師たちは全員目隠しをして、手足を麻縄で縛られていた。これだけの数、ほぼ全ての教師がいるだろう。

ハヤテは顔をさらに出すと、テロリストたちは全員教師の方を向いていて、誰一人とハヤテに背中を向けていない。

が、机の陰になっていて見つかりにくいところにいるので、ハヤテはまだ見つかっていない。

「では先生。僕の合図で一斉に投げますよ？」

「わかったわ」

顔を覗かせるハヤテに、雪路は不敵な笑みで答えた。

2人は、スタン・グレネードの安全ピンを全て外す。1人はチマチマと手で、1人は豪快に歯で。

「3……」

「2……」

投げる体制に入る。上で、何か変化は起きていない。

「1……」

2人の顔に汗が走る。

「今です！」

ハヤテはそう言うとグレネードを投げ入れた。雪路もそれに習い大量に投げる。同時に、後ろでは他のメンバーが臨戦態勢に入った。

床穴を通して、グレネードたちは職員室へと吐き出されていく。全てが弧を描き、宙を舞う。

「ん？　何だあれは？」

1人の兵士がグレネードに気づき、近づいていく。そして、一つが乾いた音を立てて床に落ちた……。

刹那、中に大量に入れられたマグネシウムが炸裂し、１００万カンデラもある閃光、そして１７５デシベルもの高音が、職員室中を包み込み、窓ガラスを破った。

「うがぁぁぁぁぁ！！！！」

「な、何があったんだ！？　何も見えねぇ！」

「何も聞こえねぇ！」

「行きますよ！」

ハヤテが先陣を切って跳び込む。他の人も、後に続いて駆け抜ける。

敵は総勢２０名。ハヤテはそれを確認するや否Ｍ９の引き金をひく。３発の麻酔弾が風を切り、それぞれ１発ずつ敵に当たる当たった男は、何も分からず眠りにつく。

雪路は傍にいた敵に近づくと二人の頭をもち、思いっきり頭突きさせた。彼女の腕力がそれほどまでに凄かったのか、その一撃を以ってして二人は気絶した。更に――

「おるぁ！」

気絶した男の顔面をむんずと掴むと、それを棍棒のように振り回し、瞬く間に三人を撃沈させた。
その一方で、ヒナギクは近くにいる敵をなぎ払いつつ、野々原と共に人質の身柄を確保していく。

「な！？　く、くそったれ！」

ようやく視界が元に戻ったのか、テロリストたちは銃口を氷室に向ける。

「やれやれ……。こんな子供のオモチャをちょっとばかし強くしたぐらいの武器で、僕に立ち向かおうとは……」

氷室は誰に言うとも無く呟くと、胸ポケットに手を入れ、音速を超える速さで薔薇を放った。寸分の狂いも無く、全てが銃口に突き刺さる。

「その状態で銃を撃ったら、暴発するよ？」

そういうが速いかヒムロは次の瞬間敵の懐にもぐりこみ、鳩尾めがけ怒りの拳をぶつける。

執事は超人、――流石にサ○ヤ人には劣るが――と同意義、空も飛ぶことが出来る。そんな一流の執事の拳を喰らって立てたものはいなかった。そして最後の1人も地に倒れる。

「あれだけの数を１０秒足らずで……これが、一流の執事……」

ちなみに先ほどまでヒムロが相手をしていた数およそ１０名。１人あたり１秒で撃沈させていった計算である。

「さて、人質は体育館に非難させよう。３班が先導して欲しい。綾崎君は三千院家に連絡、ヘリの要請を頼む」

「はい」

TURURURURUR……

「ハヤテです。聞こえますか？」

〔どうしましたか？　ハヤテ君〕

「まずは、職員室で捕まっていた人質の確保を完了。防空壕から新しい穴を掘って外に非難させますので、ヘリの手配をお願いします」

〔わかりました。では、引き続き頑張ってください〕

「了解」

「では、先生方は野々原さんとおね――桂先生と一緒に、この穴から外に抜け出してください」

ヒナギクの指示に、体力を消耗していた先生は無言で穴に入り込んでいく。

「ああ、出番がなかったなぁ……」

出番のなかった虎鉄は非常に落ち込んでいたと言う。

「『マグナム・キャット』がやられたか」

『はい、監禁しておいた執事3名にも逃げられてしまいました。研究施設から逃げ出し、死亡が確認された例の実験体の強化骨格と、同じデザインのものを装着した者にやられた、との報告が』

「そうか……。校舎内の警備を強化しろ、こちらからも増援部隊を送る。ゴルルゴビッチ大佐の部隊が到着すれば、しばらくは持つだろう。……しかし、シャドーモセス島の事件後まもないから、あまり当てにはできんぞ」

『了解しました。ボス』

「信じたくはないが……。もしも彼があの時の少年であれば……運命だな」

セーブしますか？

Ｙｅｓ　ｏｒ　ＮＯ　？

１２話『ＥＸＩＴ～Ｍｒ，ＥＳＣは出ないけれど～』（前書き）

どうもお久しぶり、銀ギツネです。

中間考査などの諸事情で、しばらく更新できずに居ました。楽しみにしていた方々、申し訳ない限りです。

先日Ｍｅｔａｌ　Ｇｅａｒ　Ｓｏｌｉｄ４が発売されましたが、作者はまだ入手しておりません。よって、ＭＧＳ４のストーリーも把握できません。

そのため、これから先メタルギアについての設定でストーリーが進むとき、ＭＧＳ４との矛盾が生じる場合がございます。

読むときには、その点に注意してお読みください。

12話『ＥＸＩＴ～Ｍｒ，ＥＳＣは出ないけれど～』

「野々原君たちのほうは、もう少し遅れてくると思う。僕等で人質をなんとかしよう。

中学校と高校は４階にある渡り廊下、つまり高校一年生の教室のある階だ」

「確か、運よく今学校にいる生徒は中学１、２年と、高校１、２年でしたね？」

「私とハヤテ君で３階の２年生の教室を回っていくので、ヒムロさん達は上の１年生の教室をお願いします。

その後先に済んだ班が中学校に潜入ってところで良いかしら？」

「それがいいですね。では敵から無線機を奪ってそれを使いましょう」

ハヤテの提案に３人は頷くと、敵の装備もついでに奪い始める。といっても奪うのは弾丸とサーマルゴーグルぐらい。

「では、行きましょう」

ハヤテたち一行は階段を、なるべく足音を立てずに登っていく。先ほどの乱闘で、1階に居たほとんどの敵兵士は倒していた。残りの敵兵士にちょっかいをかけることなく、2階へ。

2階には主として、高校三年生の教室がある。しかし、三年生は大学受験を控えているため残っている生徒はほとんどいない。故に、パトロールをしている生徒もほとんど居なかった。

薄くなっている警戒の網を潜り抜けて3階に上ろうとしたとき、彼らは思わぬ出来事に直面した。

3階へと続く階段が、机や教材などで山積みされていて、登れなくなっていたのだ。

「これは……反対側にある階段を使うしかないようですね……」

「綾崎、私に任せておけ。私の実力ならば0．1秒で……」

そう言うなり虎鉄は竹刀を何処からか取り出し、思いっきり振り上げる。すんでのところでヒムロが竹刀を力強く握り、竹刀が振り下ろされる事はなかった。

「考えてみたまえ。これだけ山積みにされているのを壊したら音が発生するよ。そうなると敵兵士にバレて、人質も危なくなる」

「む……」

虎鉄もそのことに気づいたようで、竹刀の握り締める力を緩めた。

「3年生の教室には誰もいないはずですから、教室に身を潜めながら移動しましょう」

ハヤテたちはまた、列をなして歩いていく。そのカクカク動く姿はさながら、昔のＲＰＧの主人公のよう。

花も恥らう（使い方が違うのは勘弁だ）高校生が、不気味な行動をしているとしか言いようがない。

と、少し離れたところから敵兵がこちらに向かって歩いてきた。ハヤテたちは急いで教室の中にはいる。

ハヤテは教卓の下、ヒナギクは窓のすぐ下、虎鉄は床に化け、ヒムロはロッカーの中と、各々の近くにある隠れ場所に潜める。

やがて敵兵士の近づく音が聞こえたと思ったら、またそれは遠ざかっていく。虎鉄が教室から顔を出して確認すると、また一行は歩いていく。

「ふぅ、少し時間がかかったが、３階に着いたな」

「では、此処からは別れましょう。また後で。何かあったら無線に連絡を」

「頑張るんだよ、綾崎君」

ヒムロはそう言ったあと、階段をすたすた駆け上がっていき、それを虎鉄がついていく。

「まずは廊下を見回っている敵をトイレの個室に縛りましょう。その後最寄りの教室から救出を始めます」

ハヤテはそう言うと近づいてきた敵の口を封じ、即座に意識を失わせる。ハヤテが気絶させた兵士をトイレに引きずっていく間中、ヒナギクは近くの教室の様子を見ていた。

教室内には生徒が１０人程度、恐らく他の人間は部活やらなんやらでいないのであろう。教室内には出入り口にそれぞれ１人、教室の真ん中に１人いた。

「お待たせしました。では僕は前から入るのでヒナギクさんは後ろから。真ん中の敵は手が空いている方が」

「わかった――て、え？　前から？」

頭上にはてなマークを浮かべるヒナギクを他所にハヤテは扉に近づくと、軽く咳払いをして――

コンコン。

「誰だ？」

敵兵士は疑問に思うも、ハヤテは答えるわけがない。

注意が前のドアに向いている間に、事情を察したヒナギクは後ろのドアを音も立てず開け、正宗で音もなく近くにいた敵の首筋を叩く。

男が危うく倒れそうになるのをヒナギクが支え、壁に寄りかからせた。

その後机の下に潜り、教室のど真ん中ににいる敵に近づく。

「開けるぞ」

それと同時に、敵がドアに手をかけ、引いた。

瞬間、ハヤテは鬼人の如き力と隼の如きスピードで敵兵士を叩き潰し、真ん中の敵が唖然としている間にヒナギクが先ほどと同じように意識を刈り取った。

「大丈夫ですか？　皆さん」

急いでハヤテは、生徒の安否を確認する。ざっと見ではあるものの、誰も怪我をしていないようだ。

「では、他のクラスの救助に向かいますので静かに、このことがばれないようにしてください」

ハヤテが満面の笑みを浮かべると、ヒナギクと共に廊下に戻り、それ以降同じことを繰り返していく……。

「速かったね、野々原君、桂先生？」

「意外と速く三千院家の救助ヘリが駆けつけてきたので」

「私たちが救助しちゃった♪」

中等部校舎へと繋がる渡り廊下で、ヒムロ、虎鉄と野々原、雪路は出会っていた。野々原たちの後ろに、中等部の生徒たちが大勢いる。皆安堵したような表情を浮かべているものの、ことの深刻さを悟ってなのか1人も口をきくものはいなかった。

「さて、あとは綾崎君だね」

「まだ終わってないの？」

「どうやら時間を掛け、ゆっくり慎重に救助しているですね」

「そっか。……じゃ、皆ついて来て」

雪路がそう言うと中学生は驚くぐらいに素直に従う。彼女は本来生徒の人望に厚い教師だが、そのせいか馬鹿にされる事が多い。だから、素直に聞くということは珍しい。ま、今の状況で反抗する生徒は逆に、珍しいのだが。

やはり人間は極限状態に陥ると、船頭となる人物に従いたがるらしい。

彼らはゆっくりと、会話することなく階段を下りていった。

１２話『ＥＸＩＴ～Ｍｒ，ＥＳＣは出ないけれど～』（後書き）

次回の更新は、なるべく早めを心がけたいです……。

『テレパス&サイキック』

生徒を救出し終えたハヤテとヒナギクは、自習室の前に立っていた。敵兵から前に、ハヤテの主、三千院ナギとその友人たちはここに閉じ込めたと聞いている。敵のワナである可能性も考えられるが、そのワナをどうこうする暇もない。

突き進んでワナを『壊す』しか、道はない。

「行きますよ、ヒナギクさん」

「ええ」

ハヤテは、自習室の扉に手を伸ばす。

手に汗が滲み、僅かに震えている。それでも、ハヤテはノックをするために手を伸ばす。

――そこの扉は開けた。入る度胸があれば、入れ

『!?』

誰かに話しかけられて、ハヤテは手を止める。いや、話しかけられ

たという表現は正しくない。『誰かが、自分たちの脳に直接語りかけた』といったほうが正しいか。

ハヤテもヒナギクも、そんなことが出来る人物を知っている。たった1人しかいない。

『神父さん！？』

2人は声を上げて周りを見る。だけれども、本来呼ばれたら大抵は出てくる幽霊神父、リィン・レジオスターは彼らの前に姿を現す様子はなかった。

――どうした、臆したのか？　チキン共め。さっさと入らないか。お前らは所詮、その程度の虫けらか。中にいる私が怖いのか？

チキンのお前らの存在価値なんぞ、虫のクソを集めたぐらいにしかない。いや、それ以下だ。虫のクソに謝れ。

どうした？　はやくせんかこのピーピー（放送禁止用語）。

プチッ。

何かが切れる音がした。

ヒント1。その音源は、ハヤテの右隣である。

ヒント2。この場には、ハヤテとヒナギクしかいない。

ヒント3。ハヤテから音はしなかった。

答え。

「い、いい度胸じゃない。誰だか知らないけど、チキンとまで言われて引き下がる私じゃないわ！」

「ひ、ヒナギクさん！？」

彼女は怒っていた。激怒とまでは行かないが、何者かわからない存在に弱虫呼ばわりされたことが、クソミソ言われたことが許せないのである。

安い挑発に乗ってしまうのは、彼女の負けず嫌いの精神が故。既にダー〇・ベ〇ダー真っ青の気迫を放ち、正体の見えぬ敵に対して威嚇していた。

――なんだ。クソのお前でも怒るのか。まぁ、お前程度の存在が怒っても私には大して代わらん。わかったらさっさと――

「そんなこと、言われなくても――」

「ヒナギクさん、落ち着いて！」

何処からか取り出した木刀・正宗を上段に構える。気迫というものが凄まじく、気迫というよりかは殺気だ。その殺気を、正宗に込めて。

「入るわよ！」

扉に向かって、振り下ろした。

ビュオッ

殺気をこめた一撃に扉は耐え切れず、吹き飛んでいった。たちこめる砂煙を物ともせず、ヒナギクは鼻息荒く入っていく。ハヤテはその後を、慌てた様子で着いていった。

ヒナギクは見た。泉を、美希を、理沙を、東宮を、愛歌を、千桜を。

ハヤテは見た。ワタルを、伊澄を、咲夜を、そして……自分の主、ナギを。

「む、ムー！　ムー！」

「お嬢さま！」

「ナギ！　それに皆も！」

煙が晴れたその先に居た人物。それは体を縛られタオルを猿轡にされて口を縛られた、ナギとその愉快な仲間たち、もとい友人たち。それ以外には誰も居ない。

可笑しい。もし、頭に呼びかけていた人物の言ったとおり中に居た

とすれば、頭の中で呼びかけていた人物はナギたちの誰か、ということになる。
だがハヤテもヒナギクも、今縛られている彼らにそんな能力がないことは知っている。第一、あんな暴言を吐く人間はいない。……それに近いことを言う人はいるが。

「と、兎に角お嬢さま。今楽にしてあげますね」

ハヤテはナギたちの束縛をとこうと、足を踏み出した。

ゴッ！

『ムッ！？』

「ハヤテくん！」

自習室には置いていないはずの石膏像が、ハヤテの頭に激突した。誰かが投げつけたとか、そんなレベルじゃない。まるで、大砲に詰めて撃ちだしたかのように、勢いをつけて飛んできたのだ。

普段のハヤテなら、これを叩き落すことが出来た。しかしそれは出来なかった。ナギたちを助けようと、意識がそればかりに向いて周囲への警戒がかなり甘くなっていた。

普段のハヤテなら、頭部への衝撃が強くても血を流す程度で済んでいた。しかし今は、頭から血を流しながら地面に倒れている。起き出す様子は見えない。

「ムーッ！」

ナギは倒れる彼のそばによろうとまさに獅子奮迅するが、両手首の鎖が机の脚を通して縛っているので動けない。それでも、彼女はもがいていた。

「ハヤテくん！」

――動くな、桂ヒナギク

「！？」

体が動かない。呼ばれた反射で動きを止めたんじゃない、肩を誰かにつかまれているような感触がして、体が重い。なんとか首を動かしてつかまれている肩を見てみるが、その肩に手は乗っていない。

「ど……いうこと……！」

――俺の能力だ

今度は、ヒナギクの体が浮いた。グルンと向きを１８０度変えられ、今は亡き扉のほうを『強制的に』見させられる。

何かが浮いている。ぼやけて見えるが、確かに居る。

段々と、姿が見えてきた。全身にフィットするような、黒い革の服。

ガスマスクを被り、服と同じ色の手袋を両手に嵌めている。
病人のように痩せてはいるものの、体つきからして恐らく男。露出している肌の部分は腕と後頭部しかないが、その肌は死人の肌のようで。

「な、なによこれ……！」

――俺は、サイコ・マンティスＪｒ。見ての通り超能力者（エスパー）だ。

「エ、エスパー！？」

シュコー……。

ガスマスクを通じて聞こえてくる彼の吐息が、なんとも不気味に感じさせる。

――そうだ。去年に起こったシャドーモセス島事件を起こした『ＦＯＸＨＯＵＮＤ』の幹部。エスパーであるサイコ・マンティスの後継者。それが俺だ。

「シャドーモセスだが……なんだかわからないけど……信じられないわね……！」

――だろうな。お前の心を読んで、そんなことはわかっていた。よし、いいだろう。証拠を見せてやる。

今から、お前の好きなものを当ててやろう。いや、趣味と言うべきかな。ちょっと待ってろ。

そう言うと、マンティスＪｒは両手を掲げ、ゆっくりと下ろす。それを繰り返して、今度はその両手をヒナギクにかざした。何をするかはわからないが、何かしようとしている。

信じがたいが、本当に何かをされてしまう。ヒナギクは瞳を閉じた。

――なに！？　記憶（メモリーカード）がないだと！？　バカな、どうやってプレイしている！？

……そうか、これに記録（セーブデータ）はないのか。なんという鬼畜……。

「……どうした……のよ！」

少し、拍子抜けしたというヒナギクという。しかし拍子抜けしても、彼女の体は未だに押さえつけられている。

――ふむ。では、俺のサイキック能力を見せてやる。コントローラーを床に置いてみろ。俺の念力で動かしてやろう。

……なに、コントローラーもないだと！？　コントローラーも無しでどうやってゲームを……。しまった。そうか、これは現実（小説）の世界だったな。失敗したか。

「余計に……胡散臭いわね！」

――そう思われるのは仕方がないがしかし？　お前の体が動けないのは紛れもない俺の力だ。今、解いてやろう。

そういって、彼は右手の指を鳴らした。

パチンッ

「！？」

刹那、彼女は体を縛る見えぬ枷が外れたのを感じた。それを好機と見た。正宗を握り締める左手の力を強めて、体を低く。視線の先に居るあの男を、斬る！

「ハァァァァァァァ！」

彼女は駆け出した。

――甘いな。この男が、どうなってもいいのか？

「！？」

ヒナギクは足を止めて、男が指差す方向を向く。

「ハヤテくん！　しっかり、大丈夫？」

気絶したはずのハヤテが、未だに頭から流れる血をも厭わずにヒナギクに近寄る姿が目に入っていた。ヒナギクはおぼつかない足取り

の彼に肩を貸そうと、マンティスＪｒへの攻撃をやめて駆け寄った。

パシッ。

「……え？」

一瞬の出来事。

彼女が差し伸べた右手を、血塗れた右手で掴んだハヤテは力任せに彼女を引き寄せる。それによって勢いのついた彼女に、足をかけたのだ。

当然、思いもしなかった出来事にヒナギクは足元を取られてしまったのだ。

――この男は今、俺がサイキックを使って手駒にした。今はお前の友人じゃない、敵だ。

さぁ、綾崎ハヤテ。桂ヒナギクを倒せ！

「……」

無言の承諾をし、ハヤテはヒナギクに顔を向ける。

操られたというのは本当のようだ。彼の目に、生気という輝きはない。死んだ目をしている。その目と、頭から流れる血が余計に恐ろしく見せていた。

それでも。

「仕方ないわね。……ハヤテくん、ちょっとばかし痛い目に合わせちゃうけど、直ぐに助けてあげるから！」

――この男を傷つけることが出来るかな！？　少なからずの想いは抱いている、お前が！？

さぁ、行け！

『VS，サイコマンティスＪｒ』

『VS，サイコマンティスＪｒ』

『さぁ、行け！』

サイコマンティスＪｒが持ち上げていた両手をヒナギクに向けると、ハヤテはゆっくりと動き出した。ヒナギクの元へ歩み寄る。

その様子を見てヒナギクは木刀・正宗を斜に構えるも、動き出せない。操られているとはいえ、彼は自分にとって大事な存在の１人。

傷つけることを、ためらっていた。

「……くっ！」

『どうした、動かないのか？　いや、動けまい。本気で人を潰したのことのないお前が、迫る男を力で抑えられる？

笑止！』

操られたハヤテは、一瞬にして間合いを詰めた。それまで歩いていたのだから、こちらに来るのには時間がかかると思っていた。ヒナギクは油断していたのだ。

フオッ！

ハヤテの右腕が迫る。

『！？』

「……残念だったわね！」

それでも彼女は、剣道をかなりの年月の間嗜んでいた。それによって培われた動体視力、ならび反射神経――正確に言えば、防御神経と回避神経――は半端なかった。

隙を突かれた攻撃にも、ヒナギクはちゃんと対応し正宗で防ぐことが出来るのだ。

「たぁっ！」

ハヤテの突きを崩し、正宗で払った動作からそのまま攻撃へと移る。ハヤテの横腹を狙った引き胴は、苦もなくかわされる。しかしそれも、彼女の想定の範囲内。

「甘いわね！」

『ぬな！？』

跳ねるように下がったヒナギクは、足が地面につくと同時に駆け出し正宗で切りかかる。それに慌てた様子のマンティスが急いで腕を横に払う。それにあわせるように、ハヤテが横に倒れこんだ。彼女の一太刀が、空を切り裂く。

『お、お前！　女のくせになんて動きの良いヤツなんだ！』

「あら？　今の時代に男尊女卑じゃ生きていけないわよ？　女の子だってね、頑張ればこれぐらいできるわ！」

『……』

「……さあ、いくわよ！」

ハヤテを除くその場にいた者全員の、なんかあまり信じていないような視線に耐え切れずヒナギクは再び業物を振り下ろした。マンティスが指をくねくね動かすと、ハヤテは仰向けに倒れながらも腕を伸ばし、正宗の横腹を両掌で挟み込んだ。

皆様ご存知・真剣白刃取りである。

「……！」

互いに押さえ込もうとする力が拮抗し、正宗は震えるも先に進むことも、後に戻ることも出来ない。

「ムムムウ！（ヒナギク！）」

ナギのくぐもった、不安を感じさせる声がヒナギクの耳に入り込む。

それが力となった。

「こんなの、ハヤテ君の力じゃない」

ギシギシ

正宗は軋むような音を立てながらも、動きを見せ始めた。

刃がハヤテに向かって進みだした。

『ぬ！　……やはり、気絶している人間では力が弱いか……。ならば！』

マンティスＪｒが手を動かすと、ハヤテは挟み込んでいた正宗を開放した。それと同時に、自身は地面にピタリと伏せる。
支えを失い、力を前にかけすぎていたヒナギクは前につんのめる。
ハヤテはその足を払い、ヒナギクを転ばせた。

「や、やるじゃな――！？」

ハヤテを視界の中に入れ戻したヒナギクが見たもの。

ハヤテが、自分の主の首を締め上げていた。

「ナギ！」

『動くな！　このお嬢さんの命、惜しくはないのか？』

「ム……ムゥゥゥ！」

ヒナギクが近寄ろうとするのを見て、ハヤテは更に締める力を強める。ハヤテの意思に関わらず、ナギの苦しみにもかかわらず、マンティスＪｒの思うままだった。

『その木刀をさっさと捨てろ！』

「……」

正宗を見る。

『このお嬢さんが死ぬところが見たいのか！？』

正宗を持つ右手の指を、開いた。

『そうだ。さあ、こっちに投げろ！』

「やぁぁぁぁ！」

好機とばかりにヒナギクは正宗を握り直すと、後ろに大きく振りかぶってマンティス目掛けて投げつけた。

グサッ

槍投げの槍のように勢いを増して飛ぶ正宗は、マンティスの顔の直ぐ横の壁に突き刺さる。

『え……ちょ？』

マンティスの顔が引きつった。恐る恐る顔を横に受けてみると、彼の恐怖心を見事に煽った正宗は壁に深く突き刺さっている。

彼の目が震えた。それと同時に、ナギの首を絞めるハヤテの力が抜け、彼女の足元に倒れこんだ。

「ム、ムム！」

『――！　しま――！』

暗示をかけ直そうと手を伸ばしたが、遅かった。

ヒナギクは駆けた。

「ハァァァァ！」

一気に間合いを詰めると、伸びていた彼の腕を両腕で掴む。素早くその手を肩に掛けて持ち上げた。

「せいっ！」

『がはっ！』

一気に振り下ろすと、マンティスの体が床に叩きつけられて大きく弾む。

休む間もなく急いで正宗を掴むと、両手で壁から引っこ抜き、止めとして彼の体に突き刺した。実際木刀だから突き刺せたわけではないが、突き刺したような衝撃が体を貫き、男は意識を削がれる。口から、血が流れ出した。

「コンの……クソアマァァァァァ！」

苦し紛れの一撃。付けていたガスマスクを投げるも、彼女は木刀でさっと払う。

「許さん許さん許さん！　もう、あれを使ってやるぁぁぁぁ！　ギャハハハハハ！」

ガスマスクで覆われていた彼の素顔。とても見るに耐えないものだった。重度の火傷が彼の肌を蝕み、小さく残った膿のようなものがポツポツと斑点のように浮かび上がっている。
それほどに酷い顔を怒りと、それから生まれる笑いで酷く歪む。

ヒナギクは顔を背けたかった。

けれど、相手はこちらに攻撃をしようとしている。顔を背けるわけには行かなかった。

「顔を背けなかった、テメェの負けだ！　『『『サイコ・ダイブ』』』」

『5さいじ』（前書き）

どうも、作者の銀ギツネです。

今日の今日まで、私のＰＣは不慮の事故で壊れてしまい、更新が出来ない状態にありました。

この事情を読者の皆様に一言も申さず、お待たせしてしまったこと、深くお詫び申し上げます。

それでは、お楽しみください。

『5さいじ』

チュンチュン……

ジリジリジリジリジリジリジリジリジリ……カチッ。

「うみゅ〜……ふあぁ〜」

わたしのなまえはかつらヒナギク、5さい。いまは6じ。まどのお外ですずめがチュンチュンないてるのがきこえてくる。

ヒナはえらいから、まいあさちゃんとおかーさんにおこされるまえにおきられるの。ほめてくれる？

目をゴシゴシこすって、またねないようにする。でも、あまりやっちゃダメよって、おかーさんがいってたからすぐにやめる。

ちょっとボーっとしたあとで、ヒナのベッドの下でねてるはずのおねーちゃんを見る。

「ZZZ……」

……フフ、よだれがお口からたれてて、おもしろいかお♪

おねーちゃんの名前は、ユキジっていうの。冬にふる「ゆき」に、どうろとかの「みち」ってかいて「ユキジ」ってよむんだよ。

そーいえば、この前ゆきがふったな～。とってもキレーで、おねーちゃんといっしょにゆきダルマもつくった。

そしたらおとーさんが、「あと何回、お父さんは雪を見ることが出来るんだろう……」っていってたの。

ヒナはね、おとーさんにいったの。「またらいねんも、ゆき、ふるんでしょ？」って。

そしたらおとーさん、ヒナのあたまなでてくれたの。

おねーちゃんはこうこうせい。とってもキレーってひょうばんなんだって。

おみせにくるおきゃくさんも、おねーちゃんのことキレーっていってるよ。

ヒナ、おねーちゃん大好き。ヒナにとってもやさしくしてくれるおねーちゃん。

犬がワンワンないてて、こわかったときもたすけてくれたし、おかーさんにしかられてないてたときも、おねーちゃんがイイコイイコしてくれたの。

いつもは学校があるから、ヒナより早くおきていくの。でも、今日は日よう日。ヒナもほいくえんがない、お休み。

おとーさんとおかーさん、おしごとあるのかな？　なかったら、今日はゆうえんちいきたい。メリーゴーランドにのってみたいの。

ヒナ、いちどもゆうえんちいったことないの。たかいところはこわいからジェットコースターはダメだけど、メリーゴーランドでおうまさんにのりたい。

もう一回、目をゴシゴシして、ちゃんとはしごをつかっておりる。おねーちゃん、たまにヒナのベッドにねっころがるんだけど、おりるときに、とびおりるんだよ。でもヒナは、イイ子だからはしごつかうの。

ゆかはつめたい。けど、きもちいい。ねむけもとれちゃった。

「ＺＺＺ……」

こんどは後ろで、おねーちゃんのいびきがきこえた。グーグーいってて面白いな♪

「ン、んん……」

おっと。いけないけない、おこしちゃうところだった。でも早おきしたほうがいいんだよ、おねーちゃん？

おとーさんとおかーさんは、この下できっさてんをやってるの。ヒナたちは2かいにすんでる。

きっさてんって、しってる？　おきゃくさまに、コーヒーとか、こうちゃとかいれてあげるおみせなんだよ。

ヒナもこのまえ、おねーちゃんと、そのおともだちのかおるおにーちゃんに、こうちゃをいれてあげたら、ちゃんとおいしいっていってくれたんだよ！

……そういえば、かおるおにーちゃんがおうちにかえったら、おねーちゃん、すぐにトイレに入ったの。それも３０分ぐらい。おなかに悪いものでも食べたのかな？

おみせの中はまっくらで、だれもいなかった。そんなときは――

「んしょ。」

ズズズズ……

おみせのイスをひっぱって、その上にのる。ちょうど目のたかさにホワイトボードがくるようにしたの。

〔お父さんとお母さんは、おでかけしてきます。夕方には戻るので、いい子でお留守番をしていてください。
冷蔵庫にあるものは何でも食べて良いよ。お店は今日はお休みにしたから。

2／16　お母さんより〕

「……おでかけ、しちゃったんだ……」

イスからおりる。

カウンターを見ると、つくったばっかりの目玉やきがお皿にのってた。たぶん、ヒナの分だけ。おねーちゃんは目玉やきぐらいはつくれるもん。

パンをトースターにいれて、3分にせってい、と。

ジジジジジジ……チンッ

「はやっ！　……って、やけてない……」

トースター、こわれちゃったみたい。しょうがないから、やかないで食べてみよっ。

パグッ。もぐもぐ……。

「やいたほうが、おいしいや」

「おっはよー！」

バタンッ！

「あっ！」

ひゅうううう……ベチャ。

「あ、こらヒナ？　ダメでしょ、食べ物を床に落としちゃ？」

おねーちゃんがいきなりドアをあけたから、おどろいちゃったんだよ……。

それからごごになって、ヒナはおともだちといっしょにあそんだの。

こうえんにいって、おにごっことか、かくれんぼとか、ダルマさんがころんだ、とか。

でもヒナは、たかいところがこわいから、みんなといっしょにブランコとか、すべり台とかであそべないの。

「かつら〜！　くやしかったら、こっちにきてみろよ〜！」

「バ、バカにしないでよ！　こ、こここ、こんなすべり台ぐらい……！」

「ヒナちゃん、無理しないほうがいいよ？」

うらやましい、っておもうんだけど、でもやっぱりこわいの。

でも、つまらなくないよ？　みんなといっしょだから、どんなあそびでもたのしいの。

ブランコにのれなくても、すべり台であそべなくても、たのしいの。

「あーたのしかった！」

「ホントだね、ヒナちゃん！」

もう、くらくなりそうになっちゃってた。あまりにもたのしかったから、じかんをわすれてたの。

「あしたもあそぼーね、アイちゃん！」

「あしたはほいくえんで、あそぼーね！」

ヒナとアイちゃんは、おなじほいくえんなの。

ヒナもアイちゃんもおとーさんとおかーさんがおしごとでいそがしいから、むかえにきてくれるのはいっつもさいごの方なんだよ。

でも、ちっともさびしくないの。いつもぜったい、きてくれるもん。
おしごとがいそがしいときは、おかーさんが。
ひまなときは、おとーさんとおかーさんが。
いつもお手てつないで、赤トンボうたいながらかえるんだよ。
だから、おとーさんとおかーさんがいるから、ヒナ、さびしくないよ？

ずっと、いっしょだよね？

「たっだいま〜！」
「ああ。お帰り、ヒナ」
「お帰りなさい。お風呂沸いているから、お姉ちゃんと一緒に入っちゃいなさい」
「はーい！　おねーちゃーん！」
いえにかえると、おとーさんとおかーさんがイスにすわってたの。
このおじかんは、おきゃくさん一人ぐらいは入るんだけど、今日は

いなかったみたい。

かいだんをタッタッと上って、ヒナたちのへやのドアをあけると、おねーちゃんがテレビのまえでゲームしてたの。

「おねーちゃん！　ゲームばっかりやると、目をわるくしちゃうよ！？」

「あ、ヒナ。お帰り～」

「おかーさんが、いっしょにおふろ入りなさいだって！」

「はいはい。直ぐに行くから、先に入ってなさいな」

「はーい！」

「は～！　スッキリした！」

「こら雪路。いくら家の中とはいえ、そんなタンクトップにハーフパンツなんてみっともない格好で歩くな！
　それに、さり気なく冷蔵庫の中のビールを飲もうとするな！　お前はまだ未成年だろうが！」

「ちぇ、バレたか」

「ご飯出来てるわよ。ささ、イスに座りなさい」

「あー！　カレーとハンバーグだ！」

カレーもハンバーグも、どっちもヒナのだいこうぶつなの！

おさらにのったカレーライスの上に、小さいハンバーグがちょこんと二つのってて、とってもおいしそう！

「いっただっきまーす！」

「たんと召し上がれ」

まいちにまいにちが、とってもたのしいの。

おとーさん、おかーさん、おねーちゃん、おともだち。みーんなみんな、ヒナといっしょなの。

ヒナ、幸せだよ。

『5さいじ』（後書き）

再来週に期末考査が控えているため、おそらくその間の更新は難しいかと思います。
その代わり、できる限りの範疇で今までのお話の誤字などの修正をしたいと思います。

読者の皆様、お手数をおかけしますが、誤字をもし見つけることがあればご報告お願いできないでしょうか？
ご協力、お願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8730d/

Metal Gear Hayate

2010年10月11日04時10分発行